

酒前茶後錄

大正六年四月上浣起筆

特別  
14  
1919  
317



日田崎桂香 紙收 三款の押印を竟も  
 東より即購入る 携心定未久人るるを即ち  
 或は諸侯の 四刻者七并し 一と一と  
 く池水道雪の 或は其無待の心とん





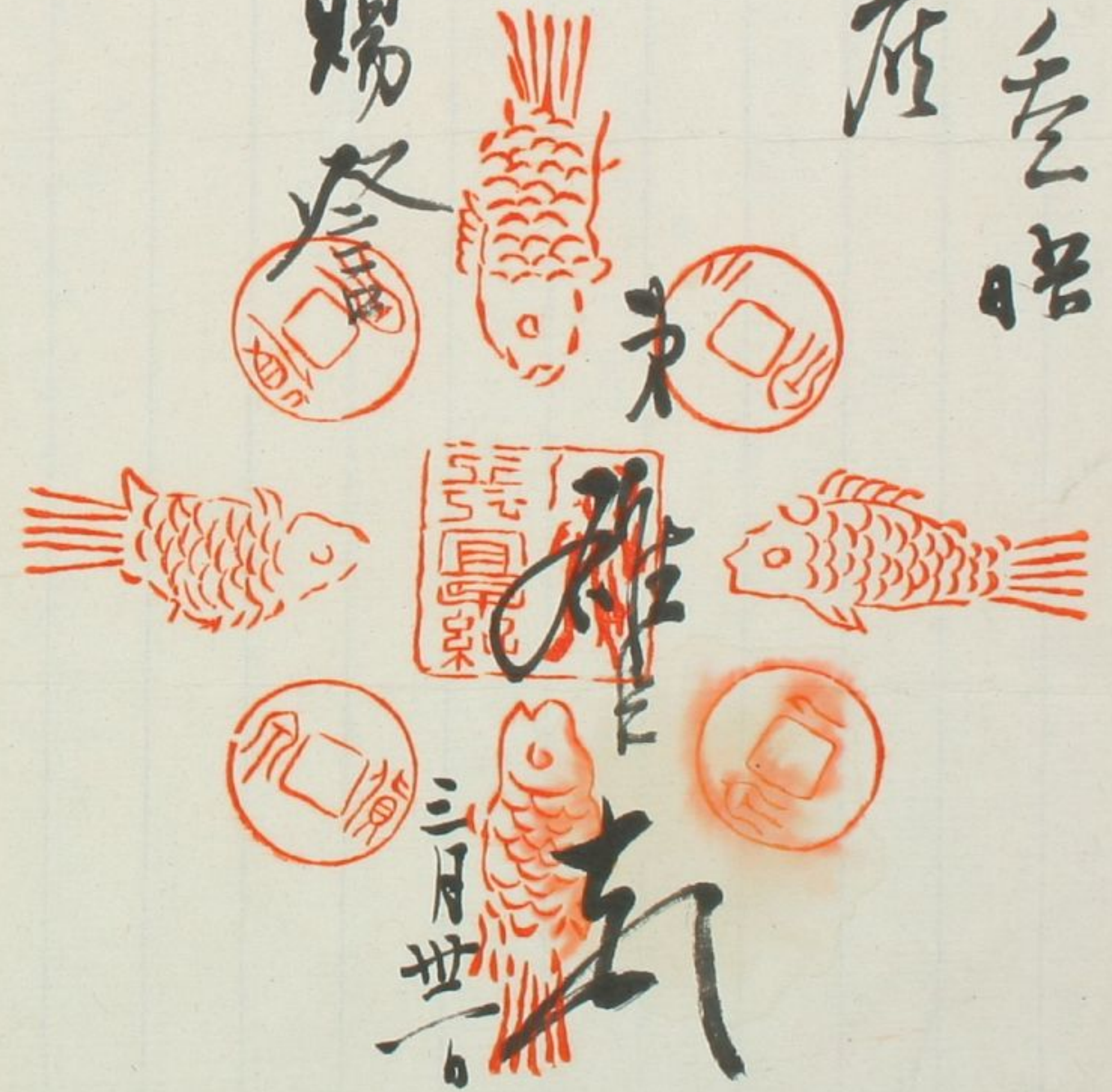
厚く、日當りたる  
拜謝申す  
文安

孫子宜長銘内

市島先生

萬寶齋製

賜



三月廿六日

つ次日三宅雪歌宅を初めたお出立の容書の侍を  
舞臺座の千む痛き中ひあるの話しに  
自分のそのうをいづる也海流の千まき侍と乾燥  
を味のあるおもひ、川流の容書を忌塔さう  
考すうと別一人を得るけん多々、自分の思ふ  
大名が文人の遊湯を考し、威るるを押ししとの  
此人である侍中、こまんとあるさうを、容書のすも  
漫筆のうをいづる也、描しのことである、と終るに、  
こつと、思ひあつたこと、土佐の容書の量、  
あつた、似て、似て、似て、いづくも、  
る、  
土佐の、  
土佐の、

峯を似つてそま、<sup>」</sup>巖の北<sup>」</sup>とびお題<sup>」</sup>一  
多由も日本人<sup>」</sup>に靴をなとびうとと雪山嶺<sup>」</sup>の  
也

○尾形乾山を輪生寺中の一室に<sup>」</sup>受かん比古の  
東願寺<sup>」</sup>移らん比<sup>」</sup>靴を乾山古江戸に移り  
上<sup>」</sup>命<sup>」</sup>の<sup>」</sup>入谷<sup>」</sup>を<sup>」</sup>定<sup>」</sup>め<sup>」</sup>の<sup>」</sup>古<sup>」</sup>室<sup>」</sup>に<sup>」</sup>相<sup>」</sup>候  
する<sup>」</sup>便<sup>」</sup>利<sup>」</sup>を<sup>」</sup>受<sup>」</sup>け<sup>」</sup>て<sup>」</sup>の<sup>」</sup>り<sup>」</sup>に<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>を<sup>」</sup>そ<sup>」</sup>の<sup>」</sup>後<sup>」</sup>に<sup>」</sup>あ  
る<sup>」</sup>此<sup>」</sup>中<sup>」</sup>の<sup>」</sup>結<sup>」</sup>言<sup>」</sup>を<sup>」</sup>ぬ<sup>」</sup>す<sup>」</sup>ん<sup>」</sup>と<sup>」</sup>う<sup>」</sup>江<sup>」</sup>戸<sup>」</sup>の<sup>」</sup>結<sup>」</sup>言<sup>」</sup>を<sup>」</sup>後<sup>」</sup>  
つ<sup>」</sup>ら<sup>」</sup>ま<sup>」</sup>い<sup>」</sup>と<sup>」</sup>云<sup>」</sup>ん<sup>」</sup>と<sup>」</sup>言<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>乾<sup>」</sup>山<sup>」</sup>を<sup>」</sup>寄<sup>」</sup>寄<sup>」</sup>す<sup>」</sup>  
<sup>」</sup>多<sup>」</sup>々<sup>」</sup>と<sup>」</sup>言<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>を<sup>」</sup>お<sup>」</sup>う<sup>」</sup>て<sup>」</sup>書<sup>」</sup>き<sup>」</sup>高<sup>」</sup>に<sup>」</sup>献<sup>」</sup>じ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>上<sup>」</sup>命<sup>」</sup>に<sup>」</sup>言  
谷、初<sup>」</sup>音<sup>」</sup>の<sup>」</sup>に<sup>」</sup>る<sup>」</sup>の<sup>」</sup>花<sup>」</sup>の<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>の<sup>」</sup>を<sup>」</sup>お<sup>」</sup>き<sup>」</sup>の<sup>」</sup>出<sup>」</sup>ぬ  
家<sup>」</sup>の<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>り<sup>」</sup>と<sup>」</sup>い<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>を<sup>」</sup>押<sup>」</sup>し<sup>」</sup>込<sup>」</sup>め<sup>」</sup>ま<sup>」</sup>く<sup>」</sup>の<sup>」</sup>死

とさう後<sup>」</sup>に<sup>」</sup>上<sup>」</sup>命<sup>」</sup>の<sup>」</sup>本<sup>」</sup>林<sup>」</sup>に<sup>」</sup>放<sup>」</sup>つ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>為<sup>」</sup>の<sup>」</sup>結<sup>」</sup>  
て上<sup>」</sup>命<sup>」</sup>の<sup>」</sup>素<sup>」</sup>に<sup>」</sup>榮<sup>」</sup>す<sup>」</sup>と<sup>」</sup>つ<sup>」</sup>て<sup>」</sup>毎<sup>」</sup>年<sup>」</sup>美<sup>」</sup>珍<sup>」</sup>を<sup>」</sup>放  
つ<sup>」</sup>秋<sup>」</sup>は<sup>」</sup>と<sup>」</sup>う<sup>」</sup>て<sup>」</sup>そ<sup>」</sup>の<sup>」</sup>結<sup>」</sup>言<sup>」</sup>に<sup>」</sup>因<sup>」</sup>り<sup>」</sup>地<sup>」</sup>名<sup>」</sup>の<sup>」</sup>起<sup>」</sup>つ  
と<sup>」</sup>ま<sup>」</sup>の<sup>」</sup>説<sup>」</sup>を<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>す<sup>」</sup>ま<sup>」</sup>の<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る

○大隈信孝<sup>」</sup>と<sup>」</sup>自<sup>」</sup>慢<sup>」</sup>の<sup>」</sup>酒<sup>」</sup>三<sup>」</sup>升<sup>」</sup>を<sup>」</sup>飲<sup>」</sup>らん<sup>」</sup>に<sup>」</sup>飲  
ち<sup>」</sup>ん<sup>」</sup>だ<sup>」</sup>ん<sup>」</sup>と<sup>」</sup>言<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>凡<sup>」</sup>に<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>○も<sup>」</sup>も<sup>」</sup>と<sup>」</sup>言<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>を<sup>」</sup>何<sup>」</sup>ま  
く<sup>」</sup>甘<sup>」</sup>味<sup>」</sup>の<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>隨<sup>」</sup>分<sup>」</sup>強<sup>」</sup>よ<sup>」</sup>い<sup>」</sup>ら<sup>」</sup>い<sup>」</sup>ら<sup>」</sup>う<sup>」</sup>の<sup>」</sup>氣<sup>」</sup>味<sup>」</sup>に  
ち<sup>」</sup>こ<sup>」</sup>め<sup>」</sup>ら<sup>」</sup>る<sup>」</sup>も<sup>」</sup>こ<sup>」</sup>ま<sup>」</sup>し<sup>」</sup>に<sup>」</sup>酒<sup>」</sup>の<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>昔<sup>」</sup>の<sup>」</sup>大<sup>」</sup>改<sup>」</sup>も<sup>」</sup>  
お<sup>」</sup>ゆ<sup>」</sup>つ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>酒<sup>」</sup>と<sup>」</sup>お<sup>」</sup>も<sup>」</sup>ゆ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>か<sup>」</sup>ひ<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>に<sup>」</sup>お<sup>」</sup>ろ<sup>」</sup>い<sup>」</sup>た<sup>」</sup>れ<sup>」</sup>  
酒<sup>」</sup>を<sup>」</sup>飲<sup>」</sup>む<sup>」</sup>に<sup>」</sup>お<sup>」</sup>ろ<sup>」</sup>い<sup>」</sup>た<sup>」</sup>れ<sup>」</sup>と<sup>」</sup>言<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>お<sup>」</sup>ろ<sup>」</sup>い<sup>」</sup>た<sup>」</sup>れ<sup>」</sup>  
大<sup>」</sup>隈<sup>」</sup>と<sup>」</sup>い<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>て<sup>」</sup>受<sup>」</sup>け<sup>」</sup>バ<sup>」</sup>白<sup>」</sup>鷹<sup>」</sup>の<sup>」</sup>あ<sup>」</sup>る<sup>」</sup>に<sup>」</sup>徳<sup>」</sup>也<sup>」</sup>  
え<sup>」</sup>と<sup>」</sup>言<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>に<sup>」</sup>此<sup>」</sup>酒<sup>」</sup>を<sup>」</sup>ぬ<sup>」</sup>く<sup>」</sup>出<sup>」</sup>さ<sup>」</sup>ぬ<sup>」</sup>と<sup>」</sup>い<sup>」</sup>ふ<sup>」</sup>大

及び聴き元、お茶のものが特別劇多をも  
受けし物なり来ルつと云ふ、自分ら既往に於て  
演る其の醇を味うればこそ、  
○此冬、心算の二部、  
教育と云ふ余の説話につき、  
あつても、  
即ち人、  
月分、  
精談し、  
のり、  
○坪内、  
：演せ、

あはれと云ふが聊を合り、  
きし、  
とぬ、  
と、  
演：改め、  
判、  
劇場、  
在、  
ん、  
引、  
七、  
○坪内、

八河廿早稲田の文科得書があの後とまよ田かおあ  
文才うある、北沢余をゆひすう其の著書、河井  
を贈らんた、漢文を兄をた店に出来てを、河井  
のお綴人を得た者だ、北男の自カをゆひすう  
評を早稲田の出版部から講読本を著  
考として刊行せんと合し、北男の編纂を把し  
うらふある、うらうく執筆者が自分も漢文に  
う書き上げたものをえると先がく遺稿  
く出来てを木可うう、出来た、不お書早  
稲田、社長の理窟をつけたよだ、  
○清海を編纂する、うらうく元帥として  
たが、幼る巷説の一行の口説きとるうらう  
十二

保元、うらうこと、ゆれた、其の流布の抱  
廣汎、海り人心、深き印象を與へ、間接、史  
的畫肉をうらう、見ん、元々又、  
うらう、河井、後、の、  
うらう、北の、  
の、  
巷説の類と不、  
一行の、  
等閑視、  
○光琳と乾山を、  
一、

(以上四月三、四日録)

延壽のやりおる原もやつたる及し、乾山を流きと  
分りし佛の返飯もあつたるを意りし、なつてつ  
ル、其の性格のおもひ、やうに、あるの、教、術、上  
の、事、著、し、ま、お、通、を、あ、ら、い、し、て、な、る、支、那、を、世、に  
ま、ま、粉、を、以、つ、て、造、る、を、い、ふ、ま、な、ら、ん、と、極、う、致、を、入  
れ、て、家、山、に、投、け、舞、あ、つ、て、ま、る、海、城、と、あ、る、ま、引  
き、換、へ、乾、山、を、泥、に、し、け、の、元、腹、を、ま、あ、け、し、弱、  
王、寺、を、い、喝、し、す、と、ま、の、無、煩、着

の、山、年、光、悦、研、究、う、進、く、進、み、光、悦、の、價、値、を、  
金、を、あ、ら、ま、と、世、に、不、得、な、光、悦、の、高、く、し、て、な  
す、ま、の、漸、く、終、極、心、を、生、ず、る、ま、の、出、し、す、ま、う、ら、う  
光、悦、も、あ、ら、ま、に、枯、れ、と、古、年、お、の、る、ま、月、旦、ま

何、七、年、の、ま、な、り、も、書、画、に、ま、な、り、と、光、悦、の、的、の、記、録  
に、之、れ、を、林、揚、し、ま、の、あ、る、ま、後、世、一、流、を、開、き、  
な、る、祖、と、ま、な、り、ま、な、り、ま、の、名、書、画、あ、る、ま、の、後、ま、  
つ、道、理、を、一、勿、論、光、悦、式、の、用、意、あ、る、ま、の、後、ま、  
換、換、を、い、ふ、と、光、悦、節、と、ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、  
ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、  
歎、の、あ、る、大、徳、し、光、悦、と、ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、  
す、や、と、極、く、ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、  
ヶ、後、の、著、者、と、腕、あ、ら、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、  
ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、  
一、ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、  
ハ、七、記、を、い、ふ、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、  
或、ま、な、り、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、ま、の、後、



とす可代とてとてくなく、  
とあるは、  
同知事也一族也而して字を連の畫の経路を今  
の如し先悦のこととて模糊なることありしが  
其の一人ありしとて以て之を今人の先悦とし  
傳はるべきこととて之を或る時代の事とて  
出まれば、  
とて刊行するを以て之を先悦傳とて美術叢書の二つ  
の間に未だおぼろげなるを名へん可保

し此の目録：  
家としての殊好也

○教養中の油田のぬき名：  
ついでに畫の幅一を得る、  
閃電の回を描き他の短歌を題する画の  
家作

何れも此の如きものなり

雲の成りたる

三伏面無き時、  
○洋行中の文を傳す、  
まことといふ、

少年左眼に砂障あり而して染るも其の酒徒  
也染るのち明立家通（高）因をあるまじく（高）す  
○昔新内赴らざる時友人に招きん即ち是年  
に既而校書勅を乞ふ侍り多し相談也一奴と  
ん子と云ふこの一未年未年勅を乞ふ也十数  
年前志がく死にありと三十有七而りも其れ  
を改め余之れを西の祖の校書勅人品優  
秀才一と稱すは心るに校書勅を乞ふは  
すと報ずは呼美人を余命下を乞ふの報解せ  
この冥土に送る別離す祖道すし  
慨然と無常を歎せざるを得んや  
○四月七日、学我日人と歌の夜をの徳刀物とを乞ふ

一者日経の娘生執事と福地のつ入の橋本房亮  
の心む如のそんじとそんじの勤一向とありしが不自  
れ抱きしもの似衆ととおもしういふ所ありと  
この御侍ある志心あり日経とていふ橋本心あり  
の傳心とていふ志心あり西洋の傳心ありと  
傳心ありとていふ志心ありとていふ志心あり  
後をの  
使師にあまが方つにこの心ありと思ひんは土倉  
主税日の暮り出る其角と大改の梅正の流し  
其角を令とて和蘭の流しつら江戶流味  
の暮り末見くまの家  
三者日経の時とていふ十六七年に其の真影  
中村流継とていふ國史を乞ふ参理とていふ

阿媽こきりもこれ流刺があの流しに時節うま  
味の新鮮しきまへに敵の例、臨有の難もある  
比位、まんなう流見んがのし七異とみるそのの  
高もあの、的確さを助成進んたと及くる、専的  
う柱もかさんて胡生柄を考へてこそなるべき  
うはくくしい、まて園十のうまを流し、毒の  
衣筆とせば印さ流し、比とまふ、田今うりて羽左東  
つ専的、福のゆえに大佛法、奥の手歌、空つと  
まふ、後刺て羽左の専的、あつて、荒るべきに  
り天物のまの、端のう、太平池とある、師其、流  
てある、割合とまも、ころ、見ん、比、河庄、つと  
「流中の紙流、歌、在、つもの、うま、粉、包、梅、玉、ひ

田う、ま、大改、或の物、去を飽、ま、む、押、し、梅、玉  
こ、ゆ、り、物、し、梅、或、向、の、流、流、雲、味、目、を、え、方、又、流  
ら、出、来、比

○四月、十日、習、乗、し、梅、花、湯、酒、の、東、台、を、敷、集  
終、こ、表、る、屋、屋、館、に、既、列、の、南、画、を、観、つ、次、山、本、場  
次、中、出、品、の、支、那、幅、巾、出、品、の、よ、う、ま、く、認、り、な  
乳、中、諸、子、節、の、秋、郊、試、由、園、大、幅、巾、の、文、伯、仁、の  
大、幅、巾、物、し、お、も、し、ろ、く、思、え、な、う、向、仁、の、大、幅、巾、  
萬、竹、干、烟、面、二、萬、壺、松、丸、三、茶、以、師、波、四、葉  
山、飛、雪、粉、細、の、市、十、八、を、考、察、す、流、石、田、山、本、場  
ま、も、又、山、石、の、出、品、に、係、り、ま、ん、も、六、珠、と、す、ま、し  
日本、畫、家、の、市、十、八、に、係、り、ま、の、由、り、目、を、悉、く、

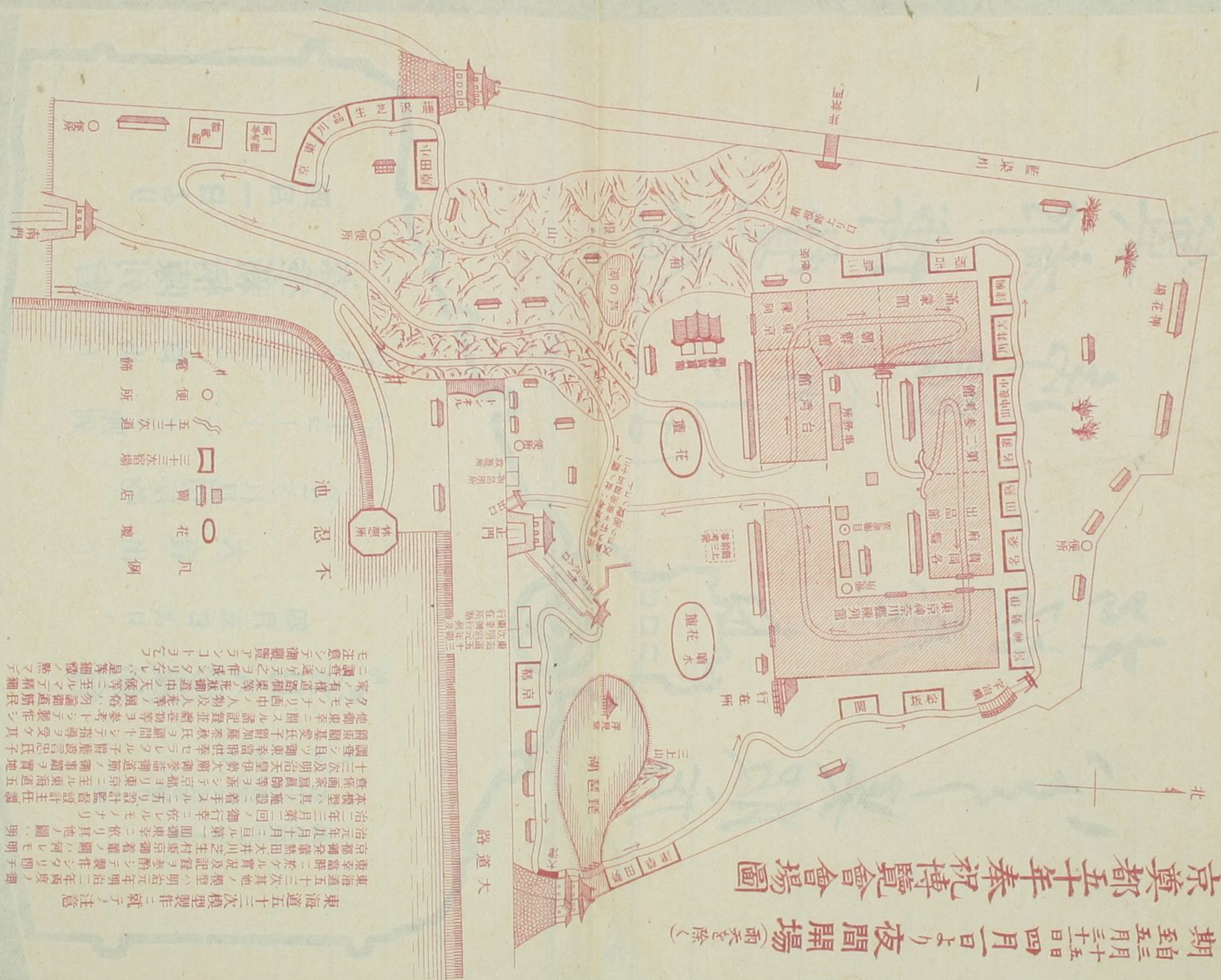
以上一茶先禪公石庵の柳屋茶室も花の  
の字を主母宮に花の書所中下環環  
回掛物娘と名一巻浦上出巻幅茶六印花  
海邊岸山並黄梁一炊回(ハ華一の換下を  
併せて陳列しあう大小の筆の筆と改を好し  
其傍書と比較するの便に性し(一画)伊原  
持邦花海庵の書秋の巻(木米荒草)  
橋の隔柳深洪園山外七犬幅高橋の珠蔵  
真仙侶回(活見)

南書二巻し終る他の陳列も(傳)後(田)里  
出(向)り(中)の(十)由(一)字(を)さ(き)回(を)う(印)の  
陳列(し)あ(う)る(事)あり(き)是(を)傳(め)て(見)る(中)井(敬)

新館の書(印)る類(巻)陳列(し)あ(う)る(或)其(好)動  
き(こ)の(足)を(傳)り(し)約(三)十(人)か(一)つ(あ)う(日)関(次)し  
る(高)流(れ)い(あ)ら(う)る(事)也(其)集(書)し(る)其(鑑)選  
集(集)し(る)事(を)も(て)ん(く)其(女)も(も)を(回)  
め(け)る(花)の(こ)の(由)と(見)ら(し)す(小)松(子)流(の)也  
記(和)三(井)本(所)海(庵)柳(屋)の(也)も(七)兄(を)う(け)  
り(又)其(中)の(の)う(き)も(書)る(事)也(加)保(泰)元(成)  
萩(原)秋(豊)殿(の)遺(印)を(認)り(し)傳(を)一(二)録  
す(る)事(也)其(の)生(奇)康(一)其(名)を(活)ひ(し)也  
其(の)お(の)花(竹)と(見)る(事)也(其)中(一)は(三)字  
同(く)し(一)流(と)傳(り)る(事)也  
東(台)教(一)束(の)序(に)真(寿)院(念)海(院)會(一)云(云)

開期自三月十五日(土)四月一日より夜間開場(雨天を除)

東京奠都五十年奉祝博覽會會場圖



東海道五十三次機擘製作に就て注意  
 東海道五十三次具他ノ機擘ハ明治二年開設ノ御  
 京御親奉儀敷田大井川芝生村東京御着儀ノ圖ハ何レモ明  
 治二年九月十日三回ノ御行幸ニ依リ其ノ圖ハ明  
 治二年三月第二回ノ御行幸ニ依リモナリ  
 本機擘ハ其ノ概設ニ着手スルニ方リ設計監督設計主任  
 菅原宗家眞眞師等ヲ派シテ京都ヨリ東京ニ至ル東海道五  
 十三次及明治天皇伊勢大朝御參詣御道筋ノ御事蹟ヲ實地  
 調査シ且ツ御東幸當時供奉セラレタル子爵熊鷹宮忠氏子  
 爵原田基受氏子爵加藤泰次氏ヲ顧問トシテ指導ヲ受ケ其  
 他御東幸ニ關スル諸記彙並繪巻物等ヲ參考トシテ製作シ  
 タルモノナリ画中人物及人衣等ノ風俗ハ勿論御道筋民  
 家ノ有様道筋御家等ノ花燈御道中ノ大儀等ニ至ルテテ解細  
 ニ調査シ遠方ニ之ヲ作成セタリ至レバ是等細微ノ點テ  
 毛注意シテ御機擘ヲラシコトス

- 凡例
- 花壇
  - 賣店
  - 三十三次場
  - 〰 五十三次道
  - 便所
  - 電飾

大道路

一巡すを海を遊覧型也。歌と遊覧のことをも先帝  
東幸の御杖と恩がらぬ。東の興味を感し。京  
都を華一三條橋の御のまゝ。淡路湖を度中  
艘の舟に。海をくま。京千代田城。入御のま  
ま。まゝのり。おもしろし。

○井上(辰九)御多聞(左)事功山竹二三を示す

十を四

濁り江を真若松か陽のまをり

善悪

大和路や日行三人善悪(き)

初花

初花や内侍の尾女岨倚ひ

又一ちつあやく田螺さひしいか  
田螺

○久須美雪堂：招へん多々花梅を親酒後  
噓とあし十数の橋通に狂文もと押し。勝酒  
舟大幡あり江戸洲城近。橋竹三首を(下)録  
す。余の玉冠の梅のゆと因に。うらま。左に録し  
て(下)る。

浮気杉柏裂衣横射佛郎枝誰六窓後  
子壯士隔重圍

貞憤不可解六火伽藍紅棒鞭馬首廻  
捺乱後花風

壯士憤謀杜、山皇如在傲方、府下るる美戸  
将入我我常祀

東台懷詠

海舟

余の花すゝもとのを首行らるも又の引あり 詠らえ  
法書言えし六七首ありおのりくく連続し詠古に  
んししし

○所収四谷見付中因在三四巻、於て一橋時代大  
學出身同定らるるあり出あり

為田甲子 小野利兵衛 地達 山崎宗次

隈本重助 津途重助 山崎 寺政尚平

卯名重助 石川千代松 田中正平 荒川義春

市山海吉 石川千代松 田中正平 荒川義春

石川海一

等も物もさう 既向ゆ代の海邊く高年の美の年  
もやと一帯を戴きし 詠らるる一秋酒を名辞をさし  
●一杯七紙まゝさるるあり年長とのありしを  
曆の數にまじしとて 因らるる赤紙やと 詠らる  
上冠とを柏手す 尚上余と因甲のありす數  
をさし、因甲中一え氣旺んるるや 自撰のあり  
いゝまゝに及ぶとあり 酒量に於て十餘才一四  
月十五日記

○四月十三日 四谷見付 渡り日本圖書館協会の  
三十五年記念会を勤め大分とつとまらるる 全五  
リニる花の會より集まらるる 詠のこゝとて 洗  
徒に無き所也 此乃報する事いこと一二あり 一と回

書寮の珍書簿列也 四 簿列部つり 凌臺寺経  
日記、書を纂集、任是、元版の五行あり

神代寺経のあざとすに戸田成宗守忠起の建白  
書あり又近年戸田成宗も修書し給ふ此の  
建白の端をながらう外に戸田忠至建白の書  
をも出さう書留天皇崩御の際に大葬  
と大葬を修めしと改めし土葬とす  
すことを建白し、書年土葬とす  
此建白の因、由ありさし、初めし  
は原本に神武天皇神代神代成碑文  
あり即ち又近年戸田の修記を  
神代書あり戸田の記も書あり此世の

此世に北碑と神代北城に埋めざる為の  
不考く世に傳へず

日記の内、定家の書と傳へんとす長秋記  
平兵衛記(一、二、三)荒干あり今の家  
は、の献すあり、定家書の節あり  
定家其書と傳へる事あり、  
の日記も定家自ら初くとす、  
や又定家に定家流の癖あり、  
心定家つ下の人、字を多  
り、  
おを定家其書と断す、  
う



著書の集部おほく多くの方を添列してあり  
と名取柳の家元厩校も著書集六冊と  
其の尤もこの中此の著書集の断片を世  
に名取の切又「難波切」と稱するものこそ断片  
と名取珠とせしむるもの也本書の体裁を列  
條綴りの子紙の落き冊子としてある能書  
家の合格者言せしもの或も公任行  
成後頼朝のどの草子なるものと云ふものも其  
の草書と認め得るものあるものもの元  
角八百年以前のものもの之を物と云ふもの  
年古河男音家「辨ひ世の字十四冊」此の陳  
列本の姉妹也

此のふし山宮後の平校を藤村雅澄著書あり  
の存存るものもあつて思ひのん

任書抄のありありとおもしろく思ひのん  
樂翁の書の書を集めて一部た成し  
大政統也とる書の由何なる一冊  
り、  
を  
樂翁の書の書を集めて一冊  
とるやと  
歴あるもの  
唐古の  
を以て補ひ或る上

神の在りて寺の仙海初あるをいして補すも  
し免とすとふれ此より出海の内、宋なる自  
の姓四書より傳の者ありしをいして其  
味あり

他：零書の珠とて出るるんをわらふと見  
のふり慶院、信智の式印字院、信清の基衛  
字院、信元、鏡字院、又安二年字院（義田の  
左記あり）運曆建保河原大宮寺の所  
を記、赤坂字院、苦庵に宋の題あり、集  
古中印と指すものあり、記に仁治三年言  
は、和風初進開板院（此のうらまは利基氏の  
記名のものあり）

他 妻曲の當の欲布の印刷目錄にあり

○四月十日、徳可頼倫侯に招らん、園寺終極  
あり、二るおん大城の別業、高院、園に地あり  
北園とて先年一ひ代招らんて行きしこと  
あり、記にちゆめの院、海の中とあり、此の一行二る名  
汽車、往復切符をむ候も、一回に買つらん  
二るの人ありと、汽車の四室に満み充らん、  
生憎の雨天、うらうら、別業ありと、雨天を、  
り四字の御舎、設けあり、用表、茶、臨行も  
備き、そとより、あむらう、あか、膝、く、  
海、金、と、つ、の、右、側、  
窓、に、丁、形、に、作、ら、ん、  
志、作、り、と、ら、ん、  
流、れ、

故味を辨せしむるに樹木の皮の  
 まくを用ひ葉菜草をまきむるは  
 のこくくくくくを用ひ金属を  
 ひす栲子テークンキルも皆皮の  
 とむを用ひておもしろく出来し  
 せしと午おのの響く打読るも  
 と忠徳も二二三の多敷に書し  
 響の響く酒七びん流の冷酒  
 一と中徳利熱同とい真念の  
 とさう自人中もよもよもよも  
 也未にる七ぢりも行きとまき  
 とす一實に實を實を生る致と  
 佐因へ

執する響を極しし今さくる  
 中一〇〇初のつは酒をい  
 て國海名をのびよとよ入念  
 のつとさる向も名くはるも  
 ことをしるはるはるも初の  
 或は酒しるもあつらふ候  
 せんあつらふことあらはる  
 或は酒具のさびを拂拭し  
 たるさき態なるも真に或は  
 響の響くをまきむるも先作  
 うけたるも友人の栲子に  
 ふと遊ぶ所をまきむるは  
 響の響くをまきむるも先作

こゝろへはるよ前こゝろにさるるこゝろにさるる主人の心をし  
の丸丸さるるよ

わろし登樓舟をほこる高麗山のりもやうさうさう  
井ひ登りうさうくのあまとも親果てを福  
：物賜りうさう余の得るを北洋楽天  
草下の信馬新まて蓮葉、鮭、故尿  
一佳形り池のまきも種り願又ん  
笑の態るをさうつあるの一方放尿の滴  
る蓮葉のまき一尺快おみ瓶を提げ  
之れをさるるの園をわのさう楽天式  
皮肉と飽らば増しある石政也

○四月十一日 田嶋桂香より根根急須と個を

購ふこゝろ桂秀物前茶室のさう井根急須を此  
こゝろの飯白新まき園に今あるさう此をを福前  
芝田の元手と稱せんを榎侯節節のほろさう  
刻えさう形と名人道人の陶器を傲るさう  
てさうと味味さう且つ茶人の手紙をさる  
わのとて手紙をさるさう光澤玲瓏緻密さ  
かじりさるさうさうさうさうさうさうさう大  
師の生風さうの二字さうさうの家臣傍を  
板を細さるさう井根急須さうさうさうの作  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
也

○桂秀芝田新物前田姓東里の七律を示さる東

里の約余の家、一紙の法、あるありし、乃ち左の  
録す

海上杉谷信示頼三村

割掬深漸事、ゆ事、隊伍、重し、朝帝景、五  
戦干支、非為利、八州、名、領、堂、徒、名、衛、校  
夜、泣、千、隈、川、横、築、秋、高、七、尾、城、逐、麻、  
市、年、紀、或、個、斯、公、義、繁、壓、群、英  
東里初の典之助と稱し、後通と改む、會一、度、中  
金と同時名を同のり、此人、り、其、通、と、改、め、れ  
る所以、通、信、と、宗、釋、と、る、出、る、平、忍、郎  
〇四月十七日、録、新、兵、を、購、ふ、こと、決、す、余、の、培  
十、数、年、前、任、領、借、の、者、今、に、於、て、狭、隘、を、告、ぐ、る

の、り、か、ら、り、隣、地、の、の、り、校、以、後、園、の、経、界、に  
た、り、溝、を、築、き、今、に、凡、氣、を、逐、新、し、了  
る、取、早、一、夏、時、住、す、然、ら、ず、於、茲、多、年、内  
子、の、法、を、拒、え、と、る、余、も、漸、や、く、去、を、決、し、り、就  
石、を、購、ら、ん、と、一、節、に、資、を、得、る、心、を、甚  
し、め、ら、り、先、つ、ら、又、年、志、集、の、書、書、畫、骨、董  
も、信、賣、し、去、り、の、易、く、人、こ、と、を、思、ひ、家、宅、を  
の、り、る、に、殊、什、を、拖、つ、り、惜、ら、ず、思、ひ、決、意  
し、ら、ず、も、さ、り、く、萬、既、の、の、り、を、易、く、ある、の、物  
と、賣、印、す、る、こと、亦、易、く、し、初、め、と、お、地、家、を  
を、併、せ、七、五、萬、五、千、圓、程、の、の、り、を、辨  
ん、こ、と、を、度、別、し、殊、危、の、双、魚、文、を、奉、為

間と外、二三の物を内蔵久寛に贈り、如上の  
資を得んことを請ひ、幸い、内蔵の厚意に  
り、其の快流を得ざるも、本年に到り、志きうに  
家蔵も地を物もすも、思ひ、まことの得ず  
稀に、披し得ざるを、快きと、余のそと、さう  
きと、懐教番、上り、余の泣る力、に、  
日を延ぶ、こと、四月、思、く、折角、を、  
に、現任の、さ、さ、房、く、具、つ、使、さ、  
の、甲、知、又、あ、さ、さ、一、而、し、着、五、午、の、ま、を、  
現、を、し、し、信、る、の、さ、と、得、る、能、く、さ、さ、  
の、美、鱗、の、流、る、不、依、り、も、ま、一、歩、を、  
五、千、程、の、さ、の、と、得、ん、と、物、も、の、末、  
十二

の、さ、と、得、る、と、東、五、軒、の、五、来、地、に、  
経、の、を、さ、う、地、味、四、の、坪、建、保、十、  
う、く、長、尾、の、好、き、初、め、北、家、も、  
保、人、あ、さ、さ、漸、や、く、中、井、上、  
の、あ、人、北、へ、交、あ、る、こと、  
一、説、も、し、あ、お、あ、の、さ、と、  
外、者、あ、り、代、り、さ、さ、さ、  
昂、の、名、に、え、つ、て、く、  
く、建、築、料、さ、さ、も、改、  
珠、に、さ、さ、を、さ、さ、南、  
路、房、さ、さ、の、継、来、  
さ、さ、さ、先、を、移、  
道、に、懐、

ほ七十田とよしののりく不慮百と井上ら焼く  
漸ゆく六十六田とよしの魂あさる此絶終  
購入と清しし方年付を拂ひ来月中旬迄  
然とつけ登記と納まさんと約するらに  
多うとよの五千田次お更よとよ二十田の  
主と心のことり余とかりうの苦商也  
孝ひの骨董者あるの價あさる清者の  
柄するは花者の十半を夫印をば抵  
を得べしと云ふんを夫印をうするらに  
二月を要すやと何れうとを主能ら  
有無る可なり今者量中  
○四月二十日記 若しとよの  
十二

二葉のよとよのち  
いんうと人と娘  
婚あるは  
の元手と掛け  
騰し  
記ある  
これ  
得ん  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十





又又あるものところ

二千六百四 約

善也

千ある四

正江古徳也

七ある四

柳不居也

千ある四

柳不居也

六千二ある四

皆卷のきききもの二十教也

此傍約をさるる四

をゆを教多けいも方画の五十物も  
せ七三千四よ上るやもや格りしき  
るりしきもさるる四  
さるるさるるものさるるさるる

○徳選着々廿の用家林方りし結果  
さるるさるるさるるさるるさるる  
とさるるさるるさるるさるるさるる  
いりある政方をさるるさるるさるる  
おさるるさるるさるるさるるさるる  
大敗しゆしきさるるさるるさるる  
政るさるるさるるさるるさるる  
け此政方をさるるさるるさるる  
とさるるさるるさるるさるる  
回し得るさるるさるるさるる  
さるるさるるさるるさるる  
さるるさるるさるるさるる  
さるるさるるさるるさるる



を得たりと云ふは、民論政府及衆議院ありとの  
一説と云ふを得たり。人或は之を以て憲法の上と云ふ  
所及あるは、大隈氏の言を以てし、其に清  
本あるは、清と云ふは、清の言を以てし、其に清  
いまの切替は、清の言を以てし、其に清  
を左に置くは、清の言を以てし、其に清  
同一視するは、清の言を以てし、其に清  
本を改修は、清の言を以てし、其に清  
く其流を令同しといふは、清の言を以てし、其に清  
あるは、清の言を以てし、其に清  
也。人の一般に政府を以てし、其に清  
便利ありといふは、清の言を以てし、其に清

あつた。國民の印稱、衆議院の中心の大  
きき、其の言を以てし、其に清  
出馬、其の言を以てし、其に清  
上程、其の言を以てし、其に清  
ハ、其の言を以てし、其に清  
上程、其の言を以てし、其に清  
あるは、清の言を以てし、其に清  
ともいふは、清の言を以てし、其に清  
其の言を以てし、其に清  
あるは、清の言を以てし、其に清  
其の言を以てし、其に清  
其の言を以てし、其に清

ふんや也、其見地に海、各地七十回の演説  
を試み、意欲の爲に努力し、方面の好  
と功の、高田の演説を、議論を、其  
利りと、及ぶの、結果を、相する、其情け  
る、と、演説を、徳を、其、  
を、其、その、其、其、其、其、  
也、議論を、徳を、其、其、其、其、  
選、其、其、其、其、其、其、  
を、其、其、其、其、其、其、  
目を、其、其、其、其、其、其、  
を、其、其、其、其、其、其、  
を、其、其、其、其、其、其、

顕著とするに、  
選、其、其、其、其、其、其、  
を、其、其、其、其、其、其、  
大、其、其、其、其、其、其、  
を、其、其、其、其、其、其、

四月二十二日

と、其、其、其、其、其、其、  
選、其、其、其、其、其、其、  
在、其、其、其、其、其、其、  
利、其、其、其、其、其、其、  
呼、其、其、其、其、其、其、  
ハ、其、其、其、其、其、其、  
其、其、其、其、其、其、

を解する民衆におおむらも不承りして此後之選  
名籍を必らず随つて選ふるも没交渉なるを  
漢法と理解する者も選ふるの資格ありしと  
道理する者も年止選外を資格の根拠と  
すべしとを論ずるの事一の事の起るは是  
友権の廢絶戸外の法を治定の條條一これ  
を一掃するも之を選ふる権を擴張し言論の  
自由を依つて擴張と法するにあらずんば主権の  
改定も不可しと云ふは其の意なき事なりと切  
當にとするも其の條條一の條條一は其の  
切當の感なき能はざる也

四月二十一日記

十二

○國考は大分の夜ん休みの一合を修めんとし  
そのおもしろいところある和書もいろいろ  
あつたそのあつたところもあつたそのあつた  
方角もあつたそのあつたところもあつた

大分の改定の事書全ののほかに場面の全  
なるものしそをを講評田圃のたをを  
早稲田の事田圃の改定や目録の改正  
やうを云つておぼしめし、たをを  
しるべきを  
すべしと云ふこと  
場面もその物も  
しるべきを  
しるべきを

紀念碑之事を試みんとし出さしむ一層奥を深  
く余えつ事既に疑字を考きし初めを並み  
て同人の似顔を考きしつら故を思ひ返り  
る疑を疑く終るを疑く思ひく推考を  
を疑又いつも逃ける田中橋城を討つ  
れこれと固者故に疑を思ふとする  
ひある事あり

田中橋城初めを考きし初めを並み  
て同人の似顔を考きしつら故を思ひ返り  
る疑を疑く終るを疑く思ひく推考を  
を疑又いつも逃ける田中橋城を討つ  
れこれと固者故に疑を思ふとする  
ひある事あり

支那軍と湯沢五人也

飲終り漢子の某路に今高津太平洋と  
うまの二河の河に酒初に立之者少井スキ

と掃りこいふ人の需に各々を各々く樂ち  
しして去る亦大方の一証也

一以林井の學校准おる今定例のこい一同令候の業重  
おのゝを決す高等科 教室を運動場  
此を初葉の地を 木造るんも四百人と定む  
規模のよも也 十五葉のの終るも 法に二十  
田とあるし 山來高科 のを海路校を  
も生むること久矣 高等科の  
業を為すは 後東田科に  
大分印田に 供せん也 本  
才格科に入る生二千二百  
室前の事也

(四月廿六の記)

○新卒を籍のこと金を決し二十三年付を二千八百  
圓を渡し五月書登記をうんと約す金銀を七  
八分あるつききりも未だ全部にあらず借金と  
見合も物を多く全部の金を満ますんとする  
ら〜 雅儀

東五軒町完全に出地價二番六千ある田也持主  
初婚七十田とく半十交渉の未老千ある田引く  
こところの即ちこれをさる引けんとす持主の家  
包合(六十五田)のありのありの登記料七  
百五十圓其他の税をんとす持主の持主と持七十  
田とす

の傍七増入償物に比する三倍の家の  
償地償のありのありとす所以也

余の度七賦をうると三葉の地はのき土地家を  
と持んとすもむらうのきりやのりもす  
支取を其心掛ありしりやがやうのりもす  
書出月書重なる年々千田のりも二千田のり  
と書しりもん、持つて略の買入に資を此の  
るりのりも、併し余の境遇者出月書重なるの  
の金を投するの節裕を家計上生しりも  
う〜七八年以て其のりも也

人を生き延ぶるなり〜カ善きなり〜併  
し余の生き延びるなり〜一家にたりなり〜と云

のを得ずし若し十五六年前の大患に及んば  
家族のたゞも強きものなるべしとて尺寸の土  
地も田の量も幾くともしきり大患金後敢て  
子孫の國をもつとえざるをあるを境邊漸く  
庄屋に向ひ前より庄屋合村に三千石の土を  
獲ひ（このと為るは）買取の未償印を  
とりせざるものあり（今又印も獲ひんとす  
るあり）

病後余の境邊の漸く庄屋に向ひしとて大患の  
元陰より獲んとし前年余の家計も物持け  
つあり。友人のぬ久き也。此の所子とす也

(四月廿七日録)

○余の家と境のこし二田三十年前此前に芝濱村に  
後二十餘年前に様末町に伊賀家宅のやまに  
と出比附常一あり。前あるは湯家の家宅おき  
り地は後あるおまのこしとて、江前より  
りさるるものあり。宅も出比附あり

東五軒町三十五米の地

官車と接ししこも格と深く入りしもの  
東より西と聴くまの道路と云ふるけり  
往來の楽事とて開き多し地味と云ふは  
地味んと云ふに面を四る味也較と云ふは  
ま形也地と積り低くも持しと温氣ありと  
ふ地帯一帯一頃あり使あり又自良あり



いふ通り現任宅の井戸と散すも町通りは書地しと  
一帯に地りぬき井あり噴水溢れし庭の七分とよめ  
の池に流るる池方又外に流れ出づとんじの位も  
孫より七現任の宅も池ありと居る死方を時々の  
のよを流出せり丸を動かす池をいふゆゆのよあり  
可くともその池方の清浄さるるをいふゆゆは  
の所より樹木もさうさうとありぬきいよありと樹木  
の枝ぬきし家屋の本屋十二間川側を  
四間せぬと十ハ二の川流きさるるといふと  
後十年位七世にせん梅(のころ)と一室の春  
らきよの池に面す寝室茶室の内外三四室古杖を  
坐修りたりとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき

いふ通り寝室の廊下を修り折曲り茶室とふ  
る石側に二室あり快楽しと梅ありとありぬきとありぬき  
りく室とせぬとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
いふとありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
ふ室を概南に向ひてありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
とありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
ま側の右側に塙の門ありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
入りぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
茶室あり浴室の本屋と離れしゆらん橋をぬきとありぬき  
利きし浴室の附ありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
ともありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき  
ともありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬきとありぬき

とては備家より家ありて用お育こころ  
：縁因ありて可也 四月廿七日又探

この家のとて花をいへ花什と云ふは  
物のまもりありて花をまもつて  
あはれに似たり而も物ある花に  
九七六六人のやあはれに十年  
とまもりて没びし今よりいへ  
を得す

○四月廿八日 花の道を通るに用  
味酒：味酒の道を通るに用  
是を余に書きたるは  
今をいへばありて

此後とていへばありて  
十一時迄漸く終りて  
とていへばありて  
役ありていへばありて  
のり：納得しとていへばありて  
一冊子とていへばありて  
表紙とていへばありて  
何とていへばありて

向よりとて流る、又此に在る本條海へ、色遣の木の  
のふり彫刻し、二基の木彫を示さる見古るい  
三の像より色遣、一基を衣角七も糸の  
安んずるも一基を衣角七も糸の安んずるも  
く油和せぬと云ふ色遣、又甲く減る二基の木彫  
を靴より色遣を他りともお七し、うつくさんか葉  
と云うと云ふ余より強へて甲し示さんことを需め  
さて示さん色遣を足んやぬるもよき色遣、  
えを舞するも次つこのおさう、えを彫刻物と  
丸木、一基のぬるさうと云ふ、えを彫刻物と  
その上を樽の白木也、りえ能あるを形と  
うらより流る、色遣の寸尺、其体と細る

指圓一、色遣、あつてまこと、箱のおんむるま  
上出来より減る、一基の、を靴と云ふ、え  
を舞するも、直る、床、つとまきえんや、  
余を、回、こんと云ふ、尺の、床、似合、り、き、ま、  
体、を、あ、ら、お、も、づ、と、あ、ら、い、も、余、の、批、評、と、  
う、ら、も、い、尺、の、お、能、と、今、の、し、舞、つ、心、し、  
七、物、う、ら、と、一、笑、す、色、遣、又、甲、北、酒、井、の、古、  
を、ゆ、の、と、疎、く、し、き、し、想、す、も、あ、校、の、芝、石、  
親、ら、安、永、代、の、い、の、し、禊、を、校、施、の、大、き、  
校、後、う、ら、も、の、さ、や、親、客、を、用、し、つ、ま、の、  
も、七、お、ち、ろ、く、後、も、決、味、あ、ら、い、の、  
疎、く、と、公、指、郵、き、と、も、ある、同、と、云、の、

易し借りしをさくことさく見なせしむるが其後原  
るく傳くを丸とうとたまき幾名に傳くをて修  
ふ自分七田まを校成とまふとて又さくことさくし  
一見せまふしし

○たまらまきとて其の玩身一奴を高らしすう貯  
ふものあり、極り極致す、たまて井を自分の供して  
ゆりたる意に返向す、例へば井の大まき二心を  
見えき、節の意さく二方、細き枝の出こるを  
あつ切つて角、見え、四足七細き井を其傍  
胴に植えて麻の雌雄をゆるらすもの也、又竹の段  
ぬこ作るよと田因改向るんじ流石に味家の  
尾に横りたる丈に極味あり、昔年もの井こま

十二 田

甘菜と様さし申しとゆりたる玩身を湯をなる為  
金の板に花しあはるとしと結と似る意あり  
寄しなま良のら丹田胡粉ふの流りの見あり  
里に用ひあり、説を湯、す所をさす、此種の  
よのち実を離れたるや、却つて味あり(井の  
根)

○圓き板、板の圓田和田のあまあり、まき柳とまは、  
暖屋に作りし牛乳あ合と試あり、此家の疱丁  
うらうらと田見上げたるよのさう家の酒に似す、  
物ある板に珠什しと出さるまきハ天湯、し使  
す、この、和田の赤しと珠名とこの左の板  
甘菜一とさふらうぬを以て傳記念あり五月廿日

○多年芳集の古書は冒筆類を採りて必ぬの如し  
此ぬを採りても又きを要せり而も一を以て七愛倍禁  
し得ざるといひし今又日録印を既し其を採り  
らば出する時端しきものありしやうかすはひの今が  
の体をと不動法を重に易く換人とするるう改筆  
の亦ありあまの体は規を重に易く換人とするるう改筆  
其改を重に易く換人とするるう改筆とするるう改筆  
か改やゆかす方西の冒筆重に市價を以て書くは  
入の價に以て入るべしと二倍若くは三倍するものあり  
思ひ切つて殊什しを以てし所以也尚存する所  
のしるす前集を以て其方西の冒筆重に市價を以て書くは  
今も其在るる所全部と本宅に存するるう改筆

了る諸函物る數十紙 外三書函數十紙 印数全部 印書料全  
部 印刷費 字も古版を全部買替 類四六  
あり、此等をもわきまへて多量に買替ふことありしが  
然れども余は味上離すことを欲せざるより  
概ね自己の改味に備へしむるものだけ、店うへ  
に受けやるものあり、他 之れを 各々金と  
同ぬの人を俟つて割金受せざる可らず (五月十日)  
○友人のあつてを社とす日本石油株式会社創  
立三十年記念祝典を四枚紙に催すに付 貴社  
来同社の為の厚意を言ふも人々の謝し  
手紙を初め相高し記念品を贈りし決し余も  
七寶を功苑の花籠を贈る事とす余も此

社に對し 感あるものあり、殊に其の、社を物  
し、十年余の力と爲し、なすこと 敢てのり  
あり、係し、余も、吟と、内なる社長の友人と  
又其、幕府、陰に、助かりし、の、  
同社、公の、挨拶、今、期、せ、  
所、且、つ、の、要、も、成、花、  
ハ、之、を、成、漸、せ、日、其、の、厚、意、  
あり、社、の、記念、品、を、贈、り、し、決、し、余、も、  
と、為、の、す、事、を、入、り、  
の、者、と、ハ、云、  
(同上録)

### 狩野芳崖先生略傳

先生本苗は諸葛、姓は藤原名は延信文政十一年（今大正六年）を去る

八十九年前（正月十三日）を以て長門國豊浦郡長府に生る、幼名幸太郎、

少にして松隣又は阜隣と號し長じて翠庵と號す又容齋有容齋貫甫等の

號あり、狩野勝川の門に入りて勝海雅道と稱し晩年自ら號して芳崖と

いふ、考名は董信晴阜と號す、妣は伊孫氏、世々毛利家の畫師たり、

而して晴阜は伊川の門に學び善く狩野派の濫興を究め又奇抜の畫風あ

り狩野氏を稱するを許さる、以て先生の畫風が其天才の然らしむる所

と雖も亦其遺傳に淵源するところあるを想見すべし先生年甫めて十

九、藩命を奉じて江戸に來り本堀町狩野畫所に入り勝川に師事す實に

近世の巨匠橋本雅邦翁と同日の入門なりと云ふ爾來十有餘年畫雪の功

を積みて業大に進み遂に擧げられて熟頭となり、江戸城の大廣間天井

の裝飾の如き大任に當るに至りしが、而かも其心は未だ安むざるもの

あり、一朝自ら悟る所あり遂に別天地を啓くの必要を感ずるに至れり、

此時に當り狩野派は探幽、常信以後百餘年の墨籍を経て氣力消磨し、

粉本摸寫のみ盛に行はれ其弊の窮まる所、一幅の丹青を鐫削し去らば、

畫家の新技に係るものは纔に雲烟と暮嶽とのみ、他は悉く古大家の點

景を排列したるに過ぎず、苟も毫端一揮美術の風雲を叱咤すべきの人

にありて、豈に區々として此の如き、兒戯をなすに恐びんや、先生の

洞然大觀して自ら破格を企てたるは自然の勢なり然れども幕府の世録

を受けて百年家學を因襲し來れる狩野門中に生長し、且夕之に浸漸せ

るものにして斷然破格を試むるは容易の業にあらす、故を以て先生が

刻苦精勵心機漸く熟して得悟する所ありたるも其形相未だ成らず、彼

の新に生面を啓けるもの、通弊として忽ち奇僻に陥り爲めに同門の嘲

を招き又師家の罵に遭ふに至りしが、先生更に意を遣せず自ら信じて一

歩をも退かざりきといふ、先生又既に尋常畫家の備にあらす、奇偉側

儻天下の志あり、維新の際長藩兵馬の騷擾あるに會し、家に歸り復舊

事を願みず國事に盡す所あり、廢藩置縣の後家資を投じて或は機械の

業を起し或は山林を開拓して富源を發かんと試みしが一敗地に塗れて

赤貧洗ふが如く、己むことを得ず再び東京に出て、本分の丹青に従事

するに至れり、時に明治十年なり然れども當時世を擧て南宋畫を翫ひ、

狩野風の畫に至りては殆んど之を顧みるものなく、隨て先生の技量を

知るもの甚だ罕にして、明治十五年第一回共進會に出陳したる繪畫は

奇趣異致を以て世の笑を受け、筆墨爽快なるに拘はらず竟に賞を得ず、

次で明治十七年第二回共進會に再び山水及び櫻樹に駒の二幀を出陳

し、漸く褒賞の最劣等なる三等賞狀を得たるのみ偶々先生此繪畫によ

りて米人フエノロ博士の知る所となりて爾來深く交を訂し、爲めに

審美上頗る悟得する所あり、殊に是より潛心彩色法を攻究して仁王捉

鬼の圖慈母觀音の圖の如き審美上の材料を貢獻したること少からず、

又觀音の圖、群鬼寶鈴を曳くの圖の如き新圖案を出して彫刻、陶器、染

織金屬等に關する參考に資したること甚だ多し、是に於て先生の名聲

頗る海の外に喧傳するに至り、明治二十二年我が政府の東京美術學

校を設置するや、先生擧げられて繪畫部の主任となり生徒教養の準備

に従事し、又同校創設に關しては與て大に力あり、然るに惜哉開校に

先だつ三ヶ月病を以て溘焉長逝す、實に明治二十一年十一月五日なり、

享年六十一、谷中長安寺に葬る、佛諭して東光院臥龍芳崖居士といふ

室は烏山山氏先生に先て没す、嗣子廣崖君久しく育英の事に従ふ嫡孫政

次郎君今東京美術學校に在りて繪畫を専攻す。

先生人となり内忠實溫順にして外高邁俊逸、其父母に至孝なるは今

尚郷閭の傳ふる所たり、技藝の上にては虛懷平心好て人に問ひ苟も

取るべきものあれば喜で之を察る、其自ら信じたる所を説くに當ては

貴賤親疎の別なく必ず意を盡さざれば歇まず、而して其死に瀕する兩

三年前より始めて其心機と形相と調和するを得て畫法自在を成したる

もの、如く、其絶筆たる慈母觀音の如き畫格遠く古大家に入り人を驚

絶せしむるに足る、天若し先生に借すに餘年を以てせば、其造詣する

所果して如何ぞや、慎哉。

風雲者態  
筆迹振盪  
若中京七

我身精與  
常連筆之  
反仰軍令



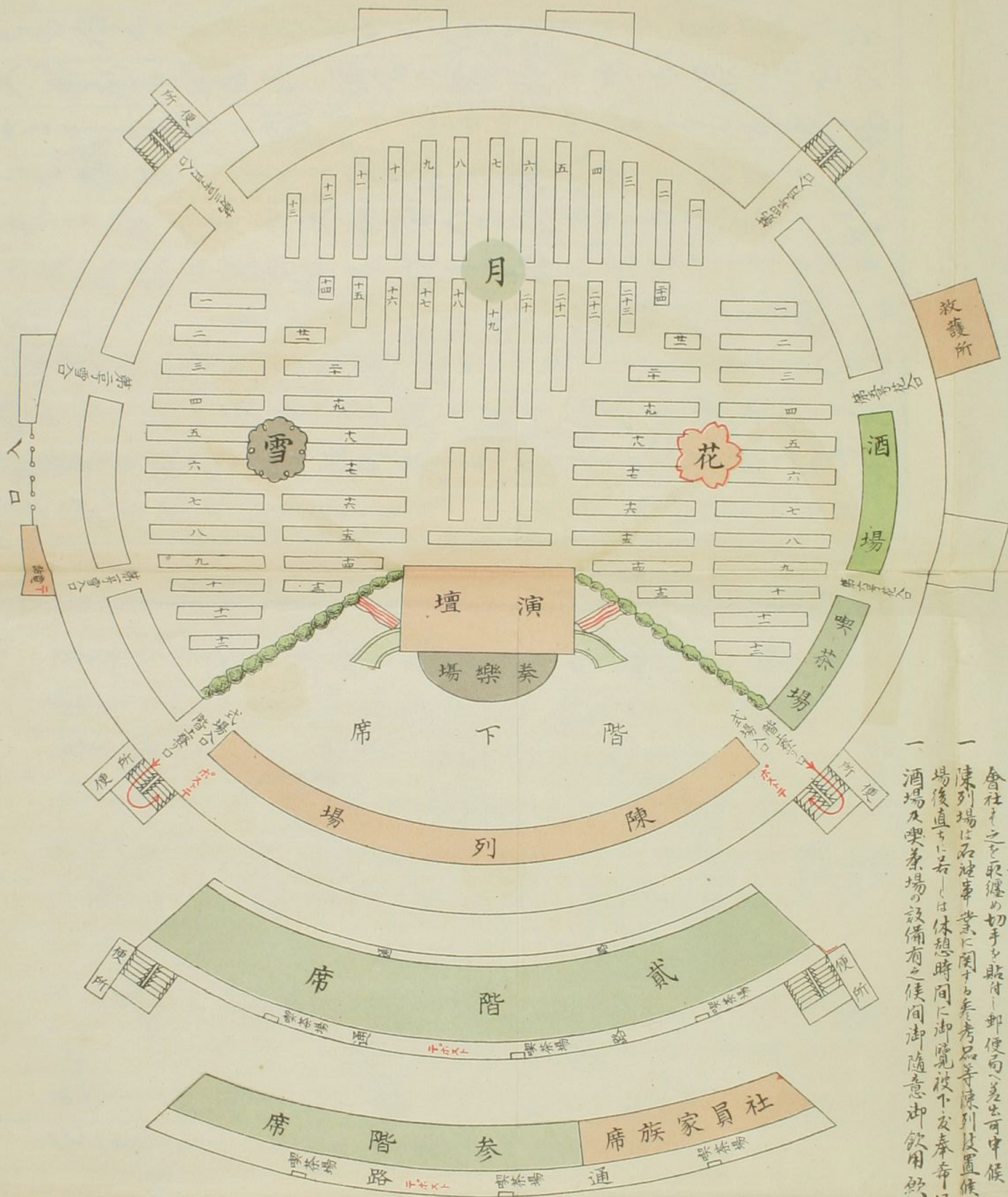


第一令儀を四投儀として七令の案を其儀類  
細くしむるに余の心つききくことをおしめる提案  
しむる設計とせんことをおの式典の心を自ら  
みかへし其位をきくも幸に令儀の由も故  
味の人より令儀内の没儀を令儀の案を  
定むる行儀をせん令儀を訂正せしむるに  
り、何れも千二三百の事をも概略するに  
し儀をせん満更せしむること言を容易の業  
にあらず殊に四投儀を個々に令儀に之を  
せん令儀をせん種をせん別をせん型七無  
きことせん令儀の苦心の禮漸を定めて人  
儀をせん大体の設計をせん左の如き圓のこと

くし一令を式儀に之を一令を令儀に之を  
り式儀の壇の案を令儀の案を木を植へ  
行儀をせんがうり二令もせん儀を設けし  
案を案をせん而も案を設計上を案を用ひ  
せん令儀の案を大體雪月花の三選に  
かち案をせん令儀の案を案を前日案  
送しせん令儀をせん也令儀の天井を  
案の心も案をせん令儀を案の心も案  
案の案をせん令儀を案の案を案の案  
せん令儀をせん令儀を案の案を案の案  
せん令儀をせん令儀を案の案を案の案  
せん令儀をせん令儀を案の案を案の案  
せん令儀をせん令儀を案の案を案の案  
せん令儀をせん令儀を案の案を案の案

花ニニ居ると冬々五五の人をとてさるる一居りけり  
 とも稀れりるるをいふ大人らりて、<sup>合衆</sup>衆家の出  
 入料地の中の時、酒客の<sup>合衆</sup>衆に此の混然と見  
 せらるる言ふ感心のかかり。田舎らも年々あつ  
 りて、~~年~~年七住する合衆う都人士に對する初見  
 冬々都人士に未だあり合してさる場所、<sup>初見</sup>初見  
 の大混模の真面目を怪し都人士を一にアット  
 感服せしむる心地よし。此の<sup>初見</sup>初見、我々の  
 肩がのちうさむを同感せしむるをさるる合衆  
 の事務の練達の一斑と認めし人々認めつらん  
 日石ら此の此の<sup>初見</sup>初見、都下大人と此の好  
 模範を示しなすべしなり。  
 (大正六年四月六日記)

日本石油株式會社創立三十周年紀念會場圖面  
 (大正六年五月五日於兩國技館)



一 豫て御手許まで差し置候食卓考より宴會場御入場候下迄  
 一 當日記念繪葉書は使用の際には場内私設のポストに御投函被下候  
 一 會社之と御禮の切手と貼付し郵便局へ差出可申候  
 一 陳列場は石燈籠等に關する参考品等陳列被置候間御入  
 場後直ちに若くは休憩時間に御覽被下友奉存候  
 一 酒場及喫茶場の設備有之候間御隨意御飲用候之候

日花の全面の祝典に費する費額は五十萬圓  
 日を起る勿論大部分を印子等に充てられ  
 主たる祝典は二十萬圓の主役十萬圓の社  
 費を充てし祝典の後の後援者等は五  
 萬圓の勿論往來存蓄を以てするに於ては  
 此の如き祝典の必要を感するに此の如き  
 の事は以上七占を以てするに於ては  
 其の祝典の旨は、恐らく二萬圓を  
 外に充てるものもある。恐らく二萬圓を  
 費したるものは、國投銀と印子とを以て  
 充てたることゝ出来るものがある。

○五月六日 昔高田書に付ゆと余をなすこと各  
二周する重なるの場域を逐く 予校中出身内給  
多々大隈茂樹の友人細像の正談に事しりしがこれ  
る荒手な授意の異論を漸く幹部改修  
とすう況に理上科方面の飛伏しと進み此方面  
と燃え移り、天竺を尋ねたりする幹部の  
現六つころころと行々たるものつぎに各校の  
善後策無きに決りず、昨年一月高田のお差  
に於て三人内渡の次第の後進に各書と魂  
この案をうりし七今の形勢よりこれを北ある行  
んず然らば高田再記を要する事とす  
此の決定は七要する事高田を総書とす各料

高田をなす大隈總書と総書とを載せし  
高田をなす改革の衝にありしあること  
○ありし高田再記と高田の記しありし  
○高田再記を要することと高田をなす  
て余の主張をなすことと高田をなす  
○七再記を由義とすことと高田をなす  
来り九月現任の主任高田満らの時ありし  
○五月六日午後二時大隈印、天杯相受祝賀の  
由ありし早稲田の死の同人二千四五名あり  
○余等と天杯相受ありし特候、既述の上  
○高田再記と高田をなすことと高田をなす  
高田と高田をなす候の高田の挨拶を例に依

り興味七あり高き七あり大衆七あり終始傾聴  
セし七あり

侯ハ開二番先ハ自分の壽を祝するを欲せざることを  
言ひこれ近き事と仰ふことを自身七世より人の請ふ  
處をぬ、而して今ハ天杯を拜受し其聖恩を感  
謝する會を有るべき事所以と敢て去々八十年  
を経る一書を祝する事あり將來の世英郎と  
理想を行ふ者前日祝して開らき其書  
と陳べ漸やく本論に入り自家の經歷を述  
る回々

自分の生れたる天保 年あり當時と誠謹年  
あり四民飢渴、困し又起るる事を言ふ自

命もまたいとなくいふ歳に生れたるありと笑  
ひ也扱て時の主権者大御所：有りて御甲家  
齊と隱退せし七尚ほ改流をみかへりて其  
中鉄湯に困し又怨嗟の聲あり満つる七再  
を仰ぐることあり大御所も憂世とてみかへり  
教を御しを極めたりと時大正の政界も山嶽  
ありとて之れを言ふに流し 約子時、不平  
を記さざるを得ぬ大改に極む大境の亂を不  
平の動を言ふ、自人の幸、不幸、うん、うん、  
七此時、生れたる事

自分の固内不平の事極邊の時、生れて不平の事  
氣を長成せし事、自人の幸、不幸、うん、うん、





○この早朝自郵と能く由あるを解ありて本  
所の邸に功の前の念祝典●をさすりてを答へし  
且つこの中余々喜々せん程との厚意を謝す  
为り玉玉五程の土体容を山花の品花を如玉香  
合茶玉玉瓶白玉玉漏瑞珀中(巻)を贈るこゝ  
其の常々余の珠氣に属せんも由ある玉玉を  
ぬを以つて吉富の架●上●置●し●えん●を  
新喜す由お快然此贈をさすけ也のく猶入見  
とす家出地の費をえつべしとを千ある由を贈  
とす千の厚意謝すくは  
○十のそのある玉玉御伊系部と秋元子爵家  
の玉玉と兄と行く、伊達家の玉玉とすくは  
大景

氣とすふこととすく下見の前日おあゝある  
さる日さるが自動車一門前に走りさすく  
む路を真々くとす旋道す、秋元家と三代続  
けても中と勤めれ家助、殊に出者の吉香、  
董と世に妖毒とすして登録せん、ある  
年とすふこととす一傍人氣の湯きこすくもさ  
肥す、ぬ辛味を一巡しす、高流石に吉香  
七骨董の伊達以上と兄とすんす、似し吉香  
とすん、樟、照、のこま、あ、名、指、散、く  
又、汚、ん、る、を、場、去、へ、き、こ、と、す、  
此、事、の、吉、香、の  
多、く、と、あ、め、的、に、名、を、傳、へ、先、中、の、款、心、を、わ  
んとす、料、を、め、き、賜、う、と、す、の、こ、と、す、  
揉、み



日本の美術は七葉の同の價ありし收運の状  
あり大枚の橋牌、汚んをれと取集りて青き  
難きよきと物作るるを此處に於ての  
と領つてせむ物作るる、此の物作るるの味  
家の汚れを底のす大をを扱ふしし梁橋  
の真山拾得を花家、あるものありし  
と傳へる一見をくす款稱をせしむ

# 秋元子爵家御藏器入札高値表

| 番號  | 品名   | 高値     | 札主 | 番號  | 品名        | 高値        | 札主 |
|-----|------|--------|----|-----|-----------|-----------|----|
| 一   | 梁橋   | 金三萬圓   | 川梅 | 一   | 六角梅繪二重香合  | 金二千七百七十八圓 | 川梅 |
| 二   | 馬山拾得 | 金四萬圓   | 川梅 | 二   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三   | 牧瀨   | 金一萬五千圓 | 川梅 | 三   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四   | 門無   | 金一萬六千圓 | 川梅 | 四   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五   | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六   | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七   | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八   | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九   | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十   | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十   | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十一  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十一  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十二  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十二  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十三  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十三  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十四  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十四  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十五  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十五  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十六  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十六  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十七  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十七  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十八  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十八  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 十九  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 十九  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 二十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 二十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 三十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 三十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 四十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 四十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 五十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 五十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 六十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 六十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 七十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 七十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 八十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 八十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十一 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十一 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十二 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十二 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十三 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十三 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十四 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十四 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十五 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十五 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十六 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十六 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十七 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十七 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十八 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十八 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 九十九 | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 九十九 | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |
| 一百  | 夏門   | 金一萬七千圓 | 川梅 | 一百  | 堆朱朱利輪花式香盆 | 金三百圓      | 川梅 |

備考  
表中記載ノ高直ハ百圓以上トシ其  
以下ハ之ヲ除ク直付ハ圓位ニ止メ  
以下切捨トス

大正六年五月十四日



東京丸の内有樂町貳ノ貳(電話本局一五八〇)

50123456789401234567893012345678920123456789

元元位也正位也善道なるよき者なり。名  
 位之優劣は河原の草花の優劣と似たり。

| 番號 | 品名 | 各 | 高       | 前 | 林 | 主 | 番號 | 品名 | 各 |
|----|----|---|---------|---|---|---|----|----|---|
| 一  | 蘇山 | 雙 | 金二千五百圓  | 川 | 蘇 | 蘇 | 一  | 蘇山 | 雙 |
| 二  | 蘇山 | 雙 | 金二千二百圓  | 川 | 蘇 | 蘇 | 二  | 蘇山 | 雙 |
| 三  | 蘇山 | 雙 | 金六百六十三圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 三  | 蘇山 | 雙 |
| 四  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 四  | 蘇山 | 雙 |
| 五  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 五  | 蘇山 | 雙 |
| 六  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 六  | 蘇山 | 雙 |
| 七  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 七  | 蘇山 | 雙 |
| 八  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 八  | 蘇山 | 雙 |
| 九  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 九  | 蘇山 | 雙 |
| 十  | 蘇山 | 雙 | 金四百八十八圓 | 川 | 蘇 | 蘇 | 十  | 蘇山 | 雙 |

# 蘇山千箇寒暄蘇器人林高

位實の強他、師空の偽者、空家の名張位長  
 年印の理比也、新羅より傳来のの生を、保  
 吹英二高橋義隆のあゝるゝ、朝吹と秋  
 元家高士の縁あり、肝要しと云ふを  
 所以也

徳兵衛二万六千圓に 價に高上るもの  
 と指すべしと云ふ

山り又赤星の受主ありと云ふ、此れは  
 茶名三三の點あり、株價格七万圓に  
 上ると云ふ盛人なる人

(五月十二日録)

○五月十四日宗家の打續人徳厚を討つるに就大  
 隈侯に謁し先代死云の節花輪を賜えん用  
 謝禮を陳ふ程を報信中一 皇意を以て宮中杖  
 を許さん事と云ふ事及此侯を奥より鳩杖を賜  
 へ先帝を以て示さん事を乞ふ事用ひらるる事  
 較ぶるを体や形のものにツカハ牙を賜  
 を刻しある物を就眼（目）を以て木を以て  
 石ツキと云ふ事内より賜ふ事に依るる中  
 下賜あり候音家  
 の此に依り銘を刻しあり候事もよも出未  
 ころぬ事を此杖を以て賜ふ候事

其のありと云ふ事

宗家就成子孫於平康民の事につき侯の  
 軍家齊の定子孫は日甲家の出と云ふ  
 傑物よりその由軍家の系統より後傑の  
 故と云ふ事亀に助と云ふ事今の者後見  
 後七徳の家達ゆき時代より其の後見  
 後をつとむる所は後傑を以て賜ふ事  
 を以て余を以てん事と云ふ事

侯と十八の家族を率へて依りて由者の縁を以て  
 此行候視念以來の養を終る法要の行り

へ為聖と事つる、大隈家の墓、かそをうてと信行  
家の母、あとしと不恰の中、依つて数月前、  
地と橋、強敷、地、墓、目、の、位、を、ま、り、墓、を、  
を、信、理、せ、ん、漸、く、出、来、を、ま、り、  
あり、侯夫●人の、  
後、有、ん、と、侯、音、家、に、あ、り、  
校、に、校、を、  
墓地、に、  
家、り、  
し、進、つ、て、  
〇廿月十二日、  
津、の、在、り、

是ハ初め也、一ゆきき着、序、  
心、く、好、う、と、克、親、の、  
居、し、  
山、  
世、  
う、く、  
名、  
と、  
道、  
花、  
く、  
ま、

を二三人に書きも部局へと渡りあせせしめられぬ  
 ののこのころ、こんな一冊もあらざるもなしくもな  
 りたぬもよまじし。あつてはつとては別な味  
 を部局へくうあつたこと強う困難にもある  
 べきに遠くは例の脚本論を打出し七  
 回脚本もなると家をつくると同様にうら  
 いらくといふ。変化もあつたが脚本とてな  
 が脚本の困難もなるとなると観客に接  
 してはあつた家へに格もせし便利一法  
 ありては家の屋台に格もあつたといふ。教  
 育を教へては別な味もあつたといふ。変化  
 ありてはつとてな。又劇文と再生杯とを

けなげ法年の氣勢と書きこむ相は一泊して  
 こととてうすめりつては遠く日本にけなげ  
 例の例代忘るる。音階とゆふ余りもは  
 晴す。氣の毒に感し拂曉。寝るも言  
 話を交へ且つ石版と紙を寄せ遠く他人  
 の思ふもあつた。苦悶をなす時、若草中へ  
 と脚本の始末をいふこと。一とては元々  
 遠くもつて。此のころ中央官給紙上に  
 人となる脚本の美観を著す。いろいろ苦心  
 してつれづれ出てきたりつて。これを  
 故ハ的の汽船といふ。遠くは、ゆふの集、就  
 く車中。遠くは、就いて程々滋味

りる話を為す、あはれと旅りをせよと云ふ余の  
物状の一也

大隈侯の別荘に指扇の間、あり本年一月二日侯  
と令嬢とおと付を二九日真興に乗つ此處を訪  
らんぞと甘味師の如く語る、高田の庄の側を  
風致ある社地あり村木村の古くは近戸神社  
と云ふ日本書紀の今と祀るなり四方津を  
尋し念のたつとて寺助改席の地と云ふ津葉  
の亮意する所の此の津葉村の地と云ふなり比  
こや考見まべし

の山草海草本流行して訪るにありし、このお経と  
長寺も其類軍に倣ふの趣ひあるを言ふ所の之れ  
と出版せんとする、世をさへする、主結あり、  
吟の徒とて、倣葉の刃に依りん、うらまをあらわし  
新嘉義徳川時代の社会の一翫を記すの史料  
と云ふ之れ、出版物の心、うけとて、二三年前、  
このりて史料を蒐集する、をさう、  
と云ふし、此、こと、つぎ、を、  
程々の、法、あり、  
是の指図に基けり、  
所を三田村に龍の神といふ、  
偏り、



酒の然もね繞りしとて扱反河井敷候と云ふを  
 最中くひくもあまするまじと進捗しひく多入の務  
 約を名もあまするまじとあま下向を切東下  
 向とすらん冊数二千、ひくぬぬに汗らん等々  
 録ものをも括ぬるる元々、吾等が此侯者にお  
 する思解と有り之んを思行する政言を左  
 のみくると。例に依り早稲田侯の現定と一統の  
 言義を因廿此等の者におき、市井の保者を  
 初を流うりこととすらん、左の政言を河井  
 の草に成りお進のか草とし、このまじり  
 政言に就てを吾等の言を味し、なる者  
 多し

近世實録全書

發行の趣旨

實録物は巷説史傳

「實録物」は一種の野乘とも傳説とも稱すべきものに  
 して、其の範圍甚だ廣し。例へば「伊達騒動」、「加賀騒動」等の如き所謂「家物」或は「天  
 一坊」、「村井長庵」等の如き政談物、或は「幡隨院長兵衛」、「國定忠治」等の如き俠客物、或は  
 「春藤次郎右衛門」、「大川友右衛門」等の如き復讐物、或は「おこよ源三郎」、「八百屋お七」、「鈴  
 木主水」等の如き情話物、其の他多少是等に類似せる巷説傳記は通例「實録物」といふ  
 總名の下に包含せらる。即ち「實録物」とは「徳川時代三百年間に起り  
 たる上中下社會の種々の著名なる事件を、多少の附會と潤色  
 とを加へて興味本位に敘録したるものに外ならず。

講談物と實録物

明治以來、或は新聞の續き物として、或は單行本として、廣く坊間に行はる、講談

筆記なるものは、概して是等「實録物」を源泉として成れるものなり。随つて其の範圍、種目、内容、性質等に於て、「實録物」と殆ど同じもの、如く見ゆれども、彼れは總て口述に係るゆる、勢ひ當座の興を主として疎枝大葉を語るに止まり、駄洒落、滑稽多く、「實録物」に比ぶれば、其の内容の充實と筆致の眞面目とに於いて遙に劣れり。

蓋し講談は、享保以後次第に發達せし一種の民間藝術にして、娛樂消閑の一具として頗る有力なりしのみならず、甚だ不正確ながらも、史傳的知識を下層社會に普遍せしむる一機關としても有效なりしなり。まして其の底本ともいふべく、又、それら諸講談を集大成せるものといふべき「實録物」に至りては、更にそれ以上の效用を有し得べきものにして、現に舊幕時代には都鄙を通じて之を「寫本物」「實録物」などと呼びならはして、廣く愛讀し、閑人は屢、其の全部をすら謄寫して珍重せりき。

### 實録物の特質

「實録物」の特質は、其の名の示すが如く、ともかくも實説たる事を標榜する點にあり。又成るべく自然に、成るべく事實らしく事件を敘述せんと力

めたる點にあり。又行文が極めて平易通俗にして、殆ど口語體に近く、興味本位に敘述しながらも、専ら達意を主として無要の煩はしき文飾を用ひざる點にあり。之を彼の馬琴、京傳、種彦、三馬等の小説及び草双紙等に比較せんに、彼等は各、其の脚色の巧と修辭の妙とを發揮せんとするに忙しきたため、或は又其の學識を衒耀せんとするため、動もすれば行文瑰麗に過ぎ、構想不自然を極め、却つて今日の讀者の好みには適せざれども、「實録物」にはそれらの失なし。又之を彼の講談、筆記類に比較せんに、已に前にも言へる如く、彼れの駄洒落、ふまじめなく、彼れの冗漫なく、彼れの不充實なく、彼れの輕薄なく、彼れの野卑なき點、實に「實録物」の強みなり。

### 實録物の價值

もとより「實録物」の語る所は半以上附會の巷説なるや明かなり。其の史實として信憑すべからざるは猶今日の或種の新聞雜報の如くなるや勿論なり。

而も其の附會的巷説中に含まれたる風俗及び民情には争ひ難き當世相の反映の宿るあれば、そこに一種の「眞實」を發見するを得べし。即ち「實録物」の蕪雜を極めたる敘述中に、或は斷片的に、或は聯絡的に、當時の社會の裏面消息を窺ひ知るを得。吾等が正史に依りて知る所は、主として新聞紙に喩へて言へば第一二面的、即ち表面的、公式的、大道的の事相なるが、第三面的雜報ともいふべき「實録物」は盛に其の時代の風俗、習慣、制度、法律等の實際的適用を語る。上は大名、旗本、士分より下は農工商に至る各階級の實際生活の模様をも、其の社會的相互關係の詳細をも、一々具體的に表現す。従つて當時一般の風俗、習慣、社會情態、家庭情態、經濟事情、地方交通の模様、旅中の狀況、乃至其の時代精神の大概、一般民衆の思想、感情、信仰、理想等に至るまでも髣髴として想見するに足る。誠（註）に江戸時代に於ける千代田の大奥の有様は如何なりしかを問へ。又諸大名の生活、其の日課、其の服裝、其の舉止、其の口吻、其の娛樂、其の參觀交替の模様は如何と問へ。或は旗本の特色は如何、或はまた大名と旗本との確執の由來は如何、又武士は町人に對して如何なる態度

を取りしかなど問へ。「實録物」はほゞ其の答を供給すべし。或は又是等の關係が時勢の推移に伴うて如何に變化せしかを問へ。又町人は如何なる屈辱を忍ばざるべからざりしか、彼等是如何にして其の心を慰め、其の慾望を満足せしめしかを問へ。或は旗本、奴、町奴、俠客等は何故に生ぜしか、又彼等の特殊なる感情は如何様に發露せしか等を問へ。「實録物」はほゞ其の答を供給すべし。要するに、少くとも「實録物」は、其の時代の活世態、人情、風俗、習慣等を見んには、一種の重要な材料といふを得べし。

斯く見來れば、「實録物」は從來思惟せられたる如き劣等なる慰藉娛樂の一具たるに止まらざること明かなるべし。

### 本全書の企劃

然るに「實録物」は、維新前後明治の初年までは俗に「寫本物」とも呼ばれて、謄寫本の體裁にて都鄙を通じて僅に數十軒に過ぎざる貸本屋の手にのみ存在せしものなるゆゑ、急激なる時代の變移に遭遇して、それらの寫本は漸次に散逸し、或は紙魚

に犯され終には其の名のみ傳はりて、現時は之を發見する能はざるものも少からざるに至れり。其の中の幾分かは明治の初年に刊行せられたれど、それすら今は珍書視せらるゝに及びべし。本出版部は之を遺憾とし、右「寫本物」の蒐集に力むること多年、漸く其の目的を遂ぐるを得たれば、今回其の整理を了へ、茲に本全書の刊行を實にするに至れり。是れ一つには、**通俗平易にして興味多き一般家庭の穩健なる讀物**を提供せんとするにあれど、一つには一種の**風俗史料ともいふべき民間記録**を採蒐統整せんとするにあり。

### 本全書の用意

本全書刊行の本旨は右に言へるが如くなる故に、其の材料の取捨選擇に際して、彼の講談筆記などによりて、餘りに廣く知られたる所謂「お家騒物」「復讐物」「武勇傳」「軍記物等の或物は、わざと暫く割愛し、主として**風俗史、民俗史**を暗示するものとして價值あるべきものを鑑選せり。但し是等在來の材料のみにては、本刊行の目的を大成するに足らざるの虞れあるが故に、特に斯かる方面の蘊蓄に於て秀

でられたる三田村玄龍氏を煩はして幾多珍奇なる新材料の提供を乞ひ、就中「**明治の實録**」とも假稱すべき一團を得たり。此中には、舊時の實録物以外の舊幕期の奇譚珍説を明治の初年に編録せるもあれば、近く維新前後に起りたる事蹟及び明治二十年代までに有名なりし人物を主として取扱ひたるものあり。「坂本龍馬」「島田一郎」「鳥追お松」「高橋お傳」「相政」「澤村田之助等は後者に屬す。これら多くは新聞雜報などを種として成れるものにして、其の當時繪入の小冊子として刊行せられたりしも、今は大抵廢滅して殆ど手に入れ難きものなり。本全書には、これらの「實録物」をも多く収録せり。

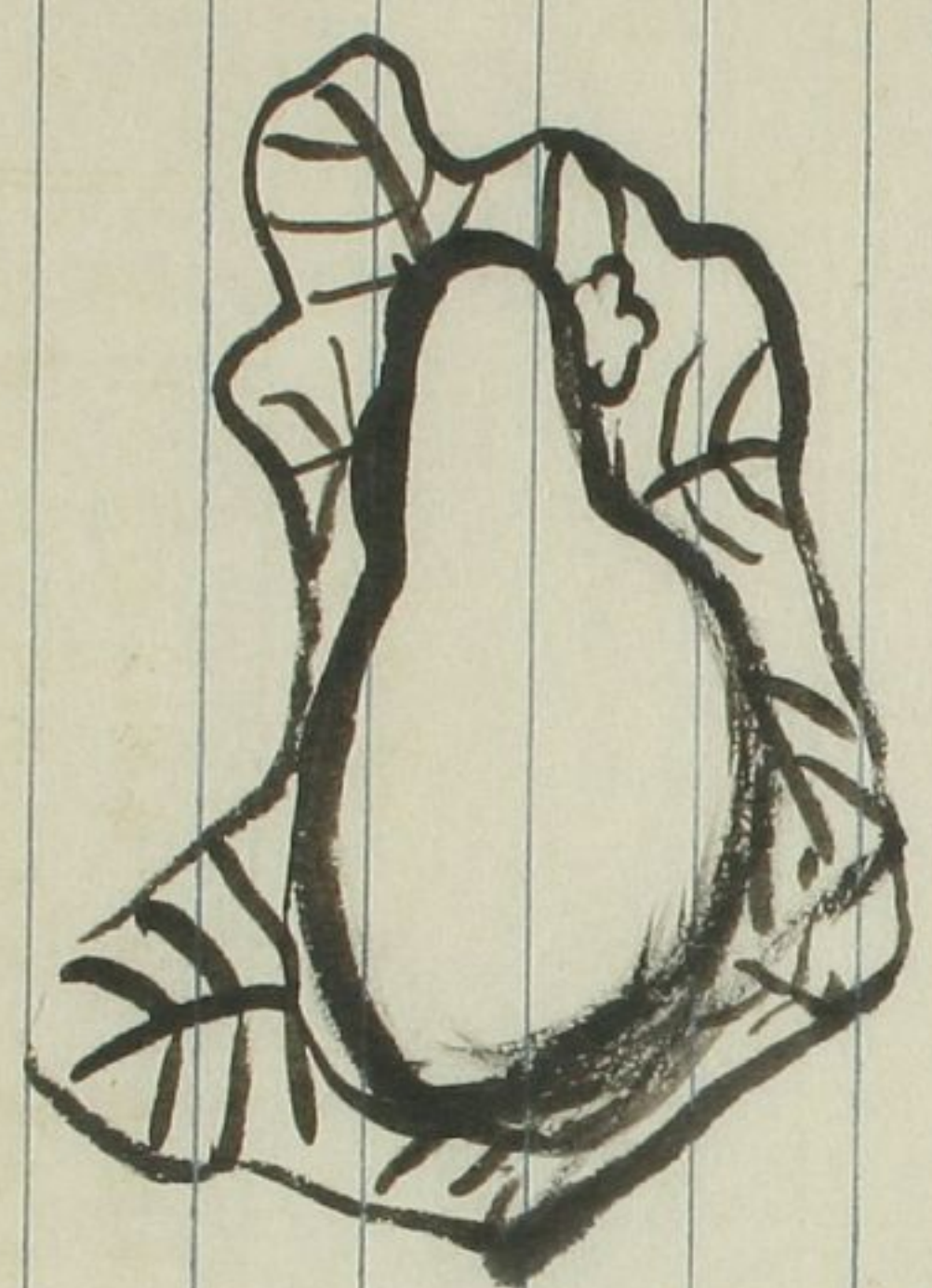
刊行に當りては、其の底本には、力めて最善なる寫本を採用したる上に、異本をも参照して嚴密に校訂し、尾籠に渡りたる詞句甚しき宛字甚しく誤れる語等を削り、又は訂正し、且つ一般に傍訓を施して何人にも讀み易からしめたり。而して各編毎に深切なる解説文を附載して、虚偽の中にも眞實を無用の中にも有用を發見するの手引となし、以て讀者の参考に資せり。即ち**在來の講談物類の底本は本刊行によりて剩す所なく編輯せられ、大成せら**

れ、且つ新意義を附與せられたりといふを得べし。

本全書の鑑選は、坪内文學博士主として當り、其の編輯校訂解説は早稻田大學文學士吉村(河竹)繁俊氏専ら擔任せり。

大正六年五月

早稻田大學出版部



この四角柱も、右端の研き面を接し、此研き  
面の端を、七と書き、その長さを、  
その中の再四角の端ありし、その長さを、  
あつし、研き面一、その長さを、

尺許の中、その長さを、  
その肉色、その花を、  
刻り、古椎、  
其の形、その皮を、  
その作、その色、  
その椎、その長、  
田也

五月十七日記

余古研十数枚を収存す而も今回三研も  
之を立て出さしに却りて一研を添ふ敢て大い  
に聚め地元の土賣次第と為せんとしてさうあ  
らうが唯これに癖あるところあり今これを  
とるべきに研は三あり印も三ありとす  
盆石の類六つ七述り

○余の今次三印と為平山を祀りける書画の内  
見家者巻六十―物等有りあり年若心し七集  
めたる中：珍と云ふき二十数巻あり(大凡  
り書も多しけり)又者三巻を不詳書し又  
亦家者巻に首父子者巻を若お山師者巻を  
も合さし)平山を祀りて物もよきとす出さる

あて不致さうと物：此の書は高橋義孝の  
余平山を祀りて物も義孝に谷巻を題示し其の  
余より十年の精力集めて一松傳人の午に物す  
る之惜あべし又も余を田ぬの人より尺の収存  
にゆきさう余の湯進すも不さうと義孝の  
書又者の文を辨えとし後之歌よのをもかくて辨  
えとし終には全部と辨ふも價二千五百  
圓と入と辨入(價格にひとしく政に判  
りあり)然れども物方に散亂するも比す心  
湯進すべし流しやもままに先んじて此の而創  
るも一類先の解決をせよとままにむし一の也  
(五月十七日録)

有るを越後の女人に命し  
其の心をたやうとす事  
同依例少く目にはげ  
香気まのふらふらと  
内式みとらる可なり

興二日内笑やとる

きし中のまに

のくちえ 蘭の

ろが

い

喜城やま  
出丈

我が家  
跡  
有

鳴

かの山村寺に印  
符と幡の北の権  
物ありと中二二  
抽子のきり素の  
石に禁豆しあり  
蓋に馮鏡あり  
方を刻す刻を  
在也

五月十日記

○字家三丈の墓とる今日に建設せん墓志撰  
又を托し事と墓又と牧中勅符あり方と日高秩  
父に托する事と撰又と紅糸あり墓の體知  
古と目一と事とるもとちあ何と事とる  
えとと家と死ある時と骨冊に納ちると物  
と一と事とる初めと別と碑と建つとるるに  
碑と建つと符と異例に居せんとも骨塔に納  
ある事と見んハ路あり墓又とるもと歎たに撰  
又と収ととる

(大正六年五月二十一日)



△友意愛

徳清春來表

先春、徳清春來表、切字徳次郎、稱徳次郎、市島氏市島氏、靜府君靜府君長子、母宣島宣島氏、明治初、三任邑長、追政府追政府新設四三銀行、選為第四銀行頭取、議、會初會初、任貴族院任貴族院議員、任滿任滿、為為人温厚、朗徹朗徹、平生無他嗜好、唯喜飲、隨隨、酬酬、隨隨、恭恭、人稱其温克、常存心報國、大凡四家有事、輒納賢助用、其他捐財、以圖利濟者、不可殫紀、前後賞賜金銀盃數次、甲午甲辰兩役、獻軍資、以功叙勳三等、性又孝、太孀人在堂、先君先君朝夕奉事、冰炭、至先不渝、大正六年春、罹

○宗族親  
姻及郎  
堂、都堂  
頼而奉  
祀為亦  
甚親口

疾、三月廿日、逝、聖生聖生弘化四年四月二十三日、年七十七年七十七、釋謚曰釋謚曰、徳徳、有立男四、女、配配、依依、存存、子子、徳徳、厚厚、嗣嗣、取取、案案、不不、育育、男男、徳徳、厚厚、子子、技技、渡渡、謙謙、撰撰、大正六年六月、建建

○前月、来、努力努力、新新、郵郵、中中、購購、入入、登登、記記、のの、日日、念念、刊刊、達達、本本、日日、のの、印印、刷刷、分分、社社、のの、社社、をを、始始、とと、登登、記記、全全、くく、通通、るる、二二、萬萬、七七、千千、四四、百百、許許、のの、一一、大大、骨骨、董董、々々、得得、りり、予予、のの、大大、正正、六六、年年、五五、月月、廿廿、五五、日日、也也

登記簿、多多、分分、簿簿、者者、而而、價價、格格、  
七、二二、萬萬、六六、千千、四四、百百、圓圓、但但、しし、四四、百百、圓圓、中中、先先、價價、格格、  
十、五五、千千、圓圓、價價、格格

貳萬六千五十四

他の修繕に在る後修繕費の外

七千五百五十四

賣込代増を以て持ちこたむるに

飲酒をふる

右登記料 五十二十一圓

但しぬい印紙五圓買入代

二合三厘割り

外に五十四圓費用謝儀等

物々ニ萬七千三百一十一圓也

外に引紙料

官紙枚数を及ぶ内之を以て購入  
架橋費

五十一圓也

但し官紙譲り代金二萬六

千餘圓の年未償却

の大隈侯体多由希し何故に改に  
日清の戦い自今七由希と昔に  
在りし一井上辰太郎も少川  
尾橋を免んことを以て却て  
お金あふあふの物を出し

まことなるゆゑに、僅に、（？）の

一 李唐 秋山 大幅

北宋宣和人後南宋画院の人とする

草書其名の跋一見と添ふ

此人の画の特徴と山と點苔を

其に細紋魚鱗を畫す

一 吳偉 (吳少仙)

漁樂圖卷

いこととるく其村の致あり

一 宋 李迪

西瓜卷

元趙宗達 夏の画 瓜をこゝろに

すゝめ 西瓜 瓜をこゝろに

すゝめ おもひ 瓜をこゝろに

一 元 柯中敬

風竹 畫幅

乾路 物

三希堂の印あり

一 畫冊 四帖

内一

宋元 玩扇集と扇す

固形物の物を集む陸心源の什と云

池二一

宋人集結と署名す恭親王の物

池二 題名ありといふ二冊

皆宋元の画を収む

此帖の内垂迹のありきか 抵ぬる款を割

くと誤ると宋元の名字の仕を疑ふ

里田家<sup>傳</sup>に傳ふる画冊に比し優るものあり

と云

畫冊中一巻に秋芳家司印の刻印を二

と痕する者ありふんを没収せん者有意

味すのり押収印あり

又儀周斑花の印を搦しは者勝りあり

由儀周の箱のありきと云ふものありしは

人塩業者といふ鑑定家より乾隆頃の

人あり

一馬遠山水横巻

巻尾に云く

畫院待诏臣馬遠敬啓

□□

雄大の表正平政のめ齋心駿田のよの

々々次兄の由ふこゝを才一と推す

王澤蘭撰書

流石に凡談多し越後又自也

黄山谷書卷

蘇紙半切に人の為り字を深するの  
引多し後修め者七二の也不  
場多し字を潤く滑振玉齋の  
と云ふ

趙子昂肉書枯村賦

子昂印褚遂良の書を憶し字の  
毫に 貞觀四年十月八日為燕

四公書とあり王世貞の書は  
もと王氏の爲印を捺す一巻尾  
に諸名家の題後多し其の  
孟厚、白璠、九山人、宗山古、就其稱  
（~~不詳~~）肉天球、黃姬子、彭年  
文、其、王世貞、董其昌、茅其、  
るゝとのり

此の賦を載しを經洲書法書に  
あり法書を出しと比較するは重毛  
好交、其、を兒す、河、以、珠、と、賢、と  
滑、く、し

傳習字

こゝろと七と江島天江の不在をうしよの  
谷藏臣の手とゆし後少阿に稱する有  
名なるよのまんといふ正本をえりて  
今ふらぬめを也華下あることきこえら  
りの説あり或は句勒本と云ひ時代  
の差をうんといふ説もあらしむが  
道振玉の終定うそを家や終てうそ  
陳代のよの者も智かうそを義之を  
臨しとてうんといふ  
昔永と義之七世の外うそ永欣寺  
に毎り義之を臨しハる本を諸寺に  
頒つこと考とてうそ也とてん其の内

のうん

七と昔子うしよを谷帳に改書す  
表裏の假子を梅遠の回書す  
或うなるよのとてふ

古書世説卷六之一

卷子本

紫衣支那に述しなるよの日本にのみある  
小西新左衛門山田永年神田秀吉前以る  
断削を爲す七と一卷うしよと切つて頒  
うなるう少阿の花本を田中ちい伯の

所為うしうそま上の際りの贈ふと  
るる、四本すべし関西の人の手に入ら  
七号と謂ふべき歟  
羅振玉近年四巻を連綴して瑠璃版  
に附し題第一七卷言本世説新書  
と云ふ羅氏の考證卷尾に在り

海念陰者

あきとるべき歟 唯然の陰也  
棟蓐少史のわりの下年本を  
あきとるべき也 谷城氏の考證  
云々

輪珠百人一首原形

北考と愛知片の某と出版に俾る  
の冷泉為泰の書出する所より  
小川を初稿と版下と二部と考  
す流石に細布り考ある人首の意  
と考と云ふなり

版下本の歌考を松浦辰男の考  
るるの〇考出版に俾る本村行  
納に考き給へしを考り松浦の考  
考考と云ふ時海に校せざるを  
しに校え

考考考の考考考の考考考の考考考







命をたゞしく早稲田の打撃に因り又侯と細谷を  
てこの命を催す候其の出えぬ者の変更する事と  
あが別々の渡候を為す事此候の説法を批判  
に命を成敗ののきり、余又高田の前途を  
せに校外生の以てこれに其の津浪をさす事と  
の渡候偶々早稲田大卒の使命と何人か  
二百もなるもの候、此頃西に於ける毎日の努力  
力と早稲田の持部が死んだと考へてちよと申す  
事とを云りしと致し徳出で成す事の命を  
高田津浪をつとめるハ早稲田大使命の一端と  
と冒頭と喝破す事し申す事也侯天正節  
受の事を在り西の校友に欲らんとて也或校友

并に中島の各官の意のあはれを  
この二の教十人言ふ立前の場合に候校友  
に厚きこと見ふべし候、此頃出法社会  
努力する立業を利用して急ぐ元元命を  
集し吐嗟外交の調査方を認め、来るべきに  
時議事の際関を眺め、此頃政府の随  
あはれく、此頃、侯は、此頃、大義  
眼に出るを見て冷嘲、此頃、寺内内  
怪むを要せず寺内、此頃、蛇孔政策  
りと、此頃、蛇孔を穿つ、此頃、他の心  
れに入ることを云ふ、此頃、侯、此頃、  
本行を司るを例とす、此頃、而して

すまを輪施し（？）本使し推し進め新（？）和神（？）を能く  
余の双肩をこし軽く候大政を云ふの日高四井上  
(辰)と共に替入洛終日閑遊を試むことを  
得たり  
六月十日新居兩宮の下に  
報す

余大政の滞在中大政の南を東の趣日教  
の家をえり早稲のちるのちの一菓を置つて  
余を圓西に暮り商科方々ののち校を  
こころ設けしと誠や在政のちを早稲校  
に圓る皆ふ可とも目あす終つ日行の高雨天  
而い之れを圓るも亦敢て不のちをさる唯  
に新りふ念ひの可とも而しと言ふもさる速決

を要す余のちある後某校友の語るに受け  
ハ其ふある日も由衣起の計畫すうと云ふと  
以てさう

大政のちの利考スるも商科の校の語るに無るに  
或る個人或る書を授けしと知るに其の由起  
但しその校の行書を早稲のちのちを起すに  
あつたはハ菓を置き易く成すに難し  
早稲のちの合校と云ふは其のちを置きのちを  
らうらうらうらうのちと云ふにその也又  
商科のちの工科を加ふるに其のちもあらん  
教授の方針を以て實地的なることを  
早稲のちの商科として其の方針味のちを

本幹する早大高野の言をくしし（一）関西の志  
することを得む

幼くして早大根拠の命にやうきとん心行  
ひびくし早大の大事に資するを志す又  
要らざる後にもなるありしも関西の志を  
之れと違ひてくすも不利也唯此関西の  
めよする此は電をの関を強と改修の  
幕府の家よりすを志すし

早大の七院に大改根拠を有する校友の  
大改に強へる年一自大なるものあり  
足湯するの又要あるところの候にが  
此正もあおし七校のこゝに在るを欲

す

南東大の志は地を人をもを志すこの志  
は東の志なり此は地を志す人をも志すの内  
この我も記するは地を志す人をも志す  
生するにともなる人早大の志にともなる  
るべき人格ある人をも志す人をも志す  
庶民の志を志すことめよするに  
にゆ余の志は東の志なり

○大隈信也余の新志をえんと欲し云々余  
流し且の其の有志の志を志す人をも志す  
人ことを志す余の志は東の志なり

昔年をとりかへて敢て福祿授けぬまは云  
 ふまを無き人の道に似てを相違なくあはれ  
 實事もあらはし治の狀態を責むるは人の  
 とするまはあはれ候但し悪略を治す  
 ●酒の儀言傍に云し直逆志を治すの  
 事集に云んと用ひぬ評するも久しき事  
 併し此酒に對しては僕もその文をう  
 ちも多量の志略を得は難儀  
 可也  
 二月十日。

○物に難ぬ 前年、原の志を以て難に報  
 復の計、余上余の志を以て難に報  
 復の文、大木清、事、と云、徳本、ちもよ、出来  
 こる、志、う、山、難、も、あ、ま、ま、其、候、志、甚  
 ちせ、ま、ん、と、志、ん、と、そ、う、れ、候、あ、ま、ま、の、今、も、大  
 志、轉、した、事、う、あ、ま、ま、の、大、山、村、木、山、の、  
 ●松、も、原、の、難、う、ら、る、の、あ、ま、ま、の、志、い、れ、候、  
 ちも、思、い、ん、る、の、志、初、り、を、難、に、志、い、れ、候、  
 ちも、思、い、ん、る、の、志、折、ん、の、つ、と、志、い、れ、候、  
 新、原、の、志、を、と、ん、る、の、事、代、ら、あ、ま、ま、の、志、い、れ、候、  
 入、り、の、志、二、十、年、前、は、池、を、堀、り、村、石、を、入、ん  
 ぬ、志、を、い、れ、思、い、ん、る、の、志、い、れ、候、油、を、い、れ、候、



として廣寺の庭を殆どは掃る義の事ありあつて  
 全体こんがりした色、家の大ききまゝ、比喩に  
 う大ききまゝの松を移つてその庭に、むせくさ  
 ーくくひりくひりの草や苔まにらして、あつて  
 かつた自死を死したる自分も死んと思つた  
 思ひ子母ある母も、も福縁の如たの際、二三人  
 を役して目撃りのものもをえ拂ふの努力かして  
 先が二三の枯樹を切り去り、楊りしうせ池の  
 づいじらひの式株、お花をえ、こまゝうら  
 々々具の縁先を狭く足も、踏ひもあつた  
 らこんとえらうあつたところ、福植し、す終  
 形とらえ、巨石の上、枝移すのおかしらまき松

う周囲の松やや湾曲を、全部を抜き  
 草を次の埋め、廿ちち尺のうもる、深  
 木の昔あつても、強う風を吹るまゝ、あつて、  
 こん草の上、露上の松をか押せして、まゝ、  
 こつと、  
 ぼりするも、向うと、北草を一掃し、  
 北松を念を、風を、具の深さの下、  
 石をうへ、洲渡の存在を、  
 リ、石をうへ、その根に、  
 こんを洗つて、  
 おかしら、  
 ここの、

つゝもあつた

池を岸より山の上を晦冥を往とてふらふこゝに  
枝は千葉ありて日見の遠くこゝを舞ふるを  
名のみらも荒干のカナメを袖に袖地との境  
に枝へ蟬をハツ千二株と岩の上に枝くぬく  
遠の趣あり

茶室の庭を茶人の意匠を覚しく清淡の意  
をこぼす唯の塙の大きなハツ千ありて  
りゝ庭中ハツ千あるをとおもしろく  
おろし桐の中ハツ千ありて桐柑(大盃)のあり  
しを見出しこゝをハツ千を換く庭の一隅に  
挿し枝くぬく所なる袖に巨石とお供つて

一海内をかくるをえぬ

茶室の側面：石をありて居る物々池の縁に  
字りりこも後つとせしむるが新あな中央に  
置きこもしこもくを自入れりて茶室あり  
の毎にお溜りて容易に乾くをさし目土多  
く流るる水糸の窪み石をえ人の遠のせ  
突起しありたるを直し

一家を此を自意に満つての心を多しと  
しこゝを指を袖に袖に空もろくを僅に  
押入ニウけりて心こゝの押をつかしむ  
廊下を心りてお回りて終境にせむ  
空を掃きと意を言てぬりてなり



修繕するもの前を見るに、あが修繕をせよと云ふこと  
きか

別産昂の爲の二宮施主地にて、以て建築する  
爲あり、其後廿の物、長つらうとある、  
折板踏するに、こころを、今を、  
便と稱ふ、  
前、  
えん、  
新、  
折、  
家、  
二、  
日、

彩三十の物、  
き、  
の、  
こ、  
を、  
初、  
リ、  
出、  
く、  
る、  
す、  
し、

彩三十の物、  
き、  
の、  
こ、  
を、  
初、  
リ、  
出、  
く、  
る、  
す、  
し、



を免えんはと一歩を進めんとすよを謂ふと  
得し

新居郷に教正の物を書け十五十六あるとトして  
十数の友人を介報やあを結ぶ二九も余る前向の  
無き所、敢て住宅を得ることを披瀝するも女  
とあり、たをを得るもつとほく人若干あり  
誤謝する所無き然り、早稲田大の幹部  
の目を見振き、とて定まらざる事の序に、位を

大正六年六月十六日録

轉るものも別に轉る糸の糸冊子あり、轉るもの  
のことも約の百の巻多きを細録す、こゝに者  
きざるもの彼の二載を、彼は是巻を

と愛すとすよ

○まゆ東他故に五峰あり、ゆひまう活次あり  
とて、此を示す別ちたう、五峰の元を  
紙に安田村高松改ちり、のめり、園を撰ぶ  
のち、命を、まゆの心を、師家の心を、  
恋を感するの、つらう

其、ち、物、人、志、幹、互、並、あり、  
一、族、大、学、の、物、を、翻、飲、こ、口、以、出、沃、若、煙、  
朝、暁、勿、伐、祖、志、也、也、知、深、志、を、  
在、勤、儉、歴、世、素、あり、本、支、庶、る、世、  
如、枝、有、好、我、耳、清、夏、日、  
長、方、繁、花、書、卷、而、得、曦、影、  
影、息、人

去古如也、物極其材、根自謂園未名待  
 子歟一言、綿、祖德昌、譬之如木、木  
 嗚呼是也、是、即可以念園、念、在茲  
 幸、備勅後日此、

不樂園記

東園復起南、接前、情若多人、金、手、極  
 乃是、原、隆、狗、衣、冠、盜、從、內、不、須、穿、  
 隙、別、破、家、海、家、幼、女、堵、路、上、何、云、迺

大正六年於  
 六月十八日 東京美術俱樂部 開札高值表  
 元 平山堂 伊藤平藏

△表中の高値は凡て四位に止む百円以下の分は除き申候△

| 番号  | 品名       | 高値    | 札主  | 番号  | 品名           | 高値    | 札主  |
|-----|----------|-------|-----|-----|--------------|-------|-----|
| 三八  | 真淵富士歌七幅  | 百十四   | 平山堂 | 一三  | 近松門九門空月花連贊   | 百四十五  | 丁字屋 |
| 九七  | 華村中觀音三幅并 | 百四十五  | 丁字屋 | 三六  | 鉄井三魂戴慈圖      | 百五十八  | 芝佐孫 |
| 一五九 | 宗豆共荷茶抄   | 百一十四  | 藤   | 三四  | 瑞園二行         | 二百三十八 | 小山  |
| 九五  | 晴湖淡彩雪中山水 | 百二    | 芝佐藤 | 六三  | 秋暉瀑布白燕       | 二百五十二 | 木口  |
| 七四九 | 根末欄間佛台   | 百五十八  | 松原  | 三九  | 文晁着色薄月横物     | 五百一十  | 佐藤  |
| 九二  | 是眞 滝     | 百一十四  | 香樹園 | 三四一 | 春敬公詩稿柱谷老松扇面張 | 百一十四  | 中村印 |
| 七三七 | 小道具一篋入   | 三百二十八 | 中村  | 一〇五 | 大久保公書簡       | 二百十八  | 伊藤  |
| 三四一 | 松里 畫     | 百十八   | 中村  | 一六一 | 近松門九門空月花連贊   | 百八    | 中村  |
| 一〇六 | 白藤文窓障子二幅 | 百二十二  | 中村  | 六四  | 長井十鶴 画       | 百一十   | 平山堂 |
| 九〇  | 本末八景障子二幅 | 百十八   | 中村  | 一〇八 | 藤里 画         | 百三十一  | 香樹園 |

去古亦近、物極其根、自謂園未名、待  
 子瞻一言、綿、祖德昌、歷、如榮木、其  
 鳴呼是也、是、即可以合園、念、去在茲、  
 幸、備勅後日、

二 榮園記

東園復起南橋前、傍若無人、金、  
 乃是廉、狗、冠、盜、從、內、不、須、穿、  
 隣、別、破、食、海、家、幼、由、堵、終、上、何、云、迺

大正六年於  
 六月十八日

東京美術俱樂部開札高值表

一 札 平山堂  
 元 伊藤平藏

△表中の高値は凡て四位に止る百円以下、分は除く、申候△

| 番号  | 品名        | 高値    | 札主   | 番号  | 品名           | 高値    | 札主   |
|-----|-----------|-------|------|-----|--------------|-------|------|
| 三八  | 真淵富士歌七幅   | 百十四   | 平山堂  | 一三  | 近松門左衛門空月花連贊  | 百四十五  | 丁字屋  |
| 九七  | 華村中觀音三幅并  | 百四十五  | 了字屋  | 三六  | 鉄井三魂獸意圖      | 百五十八  | 芝佐孫  |
| 一五九 | 宗且共荷茶枚    | 百一十四  | 佐藤   | 三四  | 瑞園二行         | 二百三十四 | 小山   |
| 九五  | 晴湖淡彩雪中山水  | 百二    | 芝佐孫  | 六三  | 秋暉瀑布自懸       | 二百五十二 | 木口   |
| 七四九 | 根来欄間佛台    | 百五十八  | 松原   | 三九  | 文晁着色薄月横物     | 五百一十  | 佐藤   |
| 九二  | 是眞 滝      | 百一十五  | 香樹園  | 三四一 | 春敏公持稿柱谷老松扇面  | 百一    | 中村一印 |
| 七三七 | 小道具一篋入    | 三百二十八 | 中村   | 一〇五 | 大久保公書筒       | 二百十八  | 伊藤   |
| 五六  | 秋暉着色梅鶴 双幅 | 百七十八  | 本山   | 一〇三 | 維新三傑書筒(西郷大佐) | 二百六十八 | 伊藤   |
| 八〇  | 翠雲臥聽涛声圖   | 百四十三  | 津田一印 | 四八  | 春琴拈木小禽       | 百一十   | 伊藤   |
| 七四  | 空海着色武陵桃源  | 百三十一  | 林    | 一七七 | 古代更紗敷物       | 六百一十  | 平山堂  |
| 一五〇 | 堆朱花鳥彫筆    | 二百一   | 伊藤定印 | 六七  | 伊藤公三行        | 九百二十  | 平山堂  |
| 七〇  | 水元公清興戲墨   | 五百十八  | 伊藤   | 一〇八 | 精里四字款        | 百三十一  | 香樹園  |
| 一〇六 | 伊藤公流世二字款  | 百二十三  | 中村一印 | 六四  | 朱章親音         | 百一十   | 平山堂  |
| 三五  | 芳崖 鐘楯     | 百四十八  | 鈴木   | 一六一 | 浪詩絵巻面硯時代模    | 百八    | 松永   |

|     |            |        |     |     |            |       |      |
|-----|------------|--------|-----|-----|------------|-------|------|
| 九   | 和亭着色文王太公望  | 千八百三十四 | 福田  | 九三  | 伊藤公三行七律一   | 三百一十四 | 川部庄印 |
| 一三五 | 唐物青貝人物香盒   | 百六十八   | 伊藤  | 一二五 | 雲鶴狂言袴香炉    | 百五十九  | 森共   |
| 二九  | 吳俊明極彩色年禮高松 | 百六十一   | 林   | 五九  | 秋暉溪流花鳥     | 百六十九  | 平山堂  |
| 四五  | 後素勤王詩      | 百三十四   | 平山堂 | 五三二 | 唐物存生見山唐子盤  | 百一十一  | 近善   |
| 四〇一 | 小堀大膳平六敷色紙  | 百七十七   | 平山堂 | 七三  | 春放公朝鮮絹七絶双幅 | 九百五十八 | 伊藤   |
| 一五四 | 唐物青貝等三本    | 百三十一   | 平山堂 | 八九  | 雅邦汝河布袋衣    | 三百六十八 | 古玩堂  |
| 一五  | 松花堂福祿壽正月燈籠 | 二百八十八  | 平山堂 | 一四  | 雪溪雪中舟人物山水  | 六百一十  | 平山堂  |
| 一三八 | 堆朱山水彫食篋    | 百五十一   | 平山堂 | 二六  | 常信李伯觀瀾     | 千五百八  | 渡辺印  |
| 八一  | 小巖春景山水     | 百二十八   | 森   | 二二  | 松花堂陶測明     | 三百三十四 | 林    |
| 七二  | 常雲米法山水     | 二百     | 大川  | 一四六 | 唐物青貝撒仁大筆   | 百八十八  | 平山堂  |
| 三九  | 雅邦鐘樓       | 百八十四   | 松原  | 八五  | 雅邦淡彩三聖     | 六百三十  | 山堂   |
| 三〇  | 常信王昭君      | 百九十四   | 福田  | 三二  | 釋尊三尊冕冠七世幅討 | 一千四   | 川部印  |
|     |            | 百二十    | 平山堂 | 六六  | 直入蓮池山水     | 百五十四  | 中村印  |
|     |            |        |     | 二九  | 完琳弟承好圖     | 百三十三  | 平山堂  |

六月八日 東京美術俱樂部開講會  
 表中之地画は凡そ巴里に於て其の最も有名なる一畫也  
 伊藤平藏

|     |            |        |     |     |            |       |      |
|-----|------------|--------|-----|-----|------------|-------|------|
| 七六  | 和亭着色文王太公望  | 千八百三十四 | 福田  | 九三  | 伊藤公三行七律一   | 三百一十四 | 川部庄印 |
| 一三五 | 唐物青貝人物香盒   | 百六十八   | 伊藤  | 一二五 | 雲鶴狂言袴香炉    | 百五十九  | 森共   |
| 二九  | 吳俊明極彩色年禮高松 | 百六十一   | 林   | 五九  | 秋暉溪流花鳥     | 百六十九  | 平山堂  |
| 四五  | 後素勤王詩      | 百三十四   | 平山堂 | 五三二 | 唐物存生見山唐子盤  | 百一十一  | 近善   |
| 四〇一 | 小堀大膳平六敷色紙  | 百七十七   | 平山堂 | 七三  | 春放公朝鮮絹七絶双幅 | 九百五十八 | 伊藤   |
| 一五四 | 唐物青貝等三本    | 百三十一   | 平山堂 | 八九  | 雅邦汝河布袋衣    | 三百六十八 | 古玩堂  |
| 一五  | 松花堂福祿壽正月燈籠 | 二百八十八  | 平山堂 | 一四  | 雪溪雪中舟人物山水  | 六百一十  | 平山堂  |
| 一三八 | 堆朱山水彫食篋    | 百五十一   | 平山堂 | 二六  | 常信李伯觀瀾     | 千五百八  | 渡辺印  |
| 八一  | 小巖春景山水     | 百二十八   | 森   | 二二  | 松花堂陶測明     | 三百三十四 | 林    |
| 七二  | 常雲米法山水     | 二百     | 大川  | 一四六 | 唐物青貝撒仁大筆   | 百八十八  | 平山堂  |
| 三九  | 雅邦鐘樓       | 百八十四   | 松原  | 八五  | 雅邦淡彩三聖     | 六百三十  | 山堂   |
| 三〇  | 常信王昭君      | 百九十四   | 福田  | 三二  | 釋尊三尊冕冠七世幅討 | 一千四   | 川部印  |
|     |            | 百二十    | 平山堂 | 六六  | 直入蓮池山水     | 百五十四  | 中村印  |
|     |            |        |     | 二九  | 完琳弟承好圖     | 百三十三  | 平山堂  |

六月八日 東京美術俱樂部開講會  
 表中之地画は凡そ巴里に於て其の最も有名なる一畫也  
 伊藤平藏

六月八日 東京美術會樂部開演會誌 伊藤平藏

| 品名         | 紙      | 寸 | 寸 | 寸   | 寸          | 寸     |      |
|------------|--------|---|---|-----|------------|-------|------|
| 和菓子着色文王太公望 | 千八百三十四 | 福 | 田 | 九三  | 伊藤公三行七律    | 三百一十四 | 川部五郎 |
| 唐物青貝人物香奩   | 百六十八   | 伊 | 藤 | 一一五 | 雲鶴狂言香奩     | 百五十九  | 森興   |
| 吳俊明極彩色年禮高松 | 百六十一   | 林 |   | 五九  | 秋暉溪流花鳥     | 百六十九  | 平山堂  |
| 後素勤王詩      | 百三十四   | 平 | 山 | 五三  | 唐物存生見山唐字盤  | 百一十一  | 近善   |
| 小堀大膳半六敷色紙  | 百七十七   | 平 | 山 | 七三  | 春放公朝鮮絹七絶双幅 | 九百五十八 | 伊藤   |
| 唐物青貝筆三本    | 百三十一   | 平 | 山 | 八九  | 雅邦淡河布袋     | 三百六十八 | 古玩堂  |
| 松花堂福祿壽三月景物 | 二百八十八  | 平 | 山 | 一四  | 雲漢雪中舟人物山水  | 六百一十  | 平山堂  |
| 堆朱山水彫合食盤   | 百五十一   | 平 | 山 | 二六  | 常信李伯觀瀑     | 千五百八  | 渡辺印  |
| 小菽春景山水     | 百二十八   | 森 | 田 | 二二  | 松花堂陶淵明     | 三百三十四 | 林    |
| 草雲米法山水     | 二百一十   | 大 | 川 | 一六  | 唐物青貝撒仁大筆   | 百八十八  | 平山堂  |
| 密洲淡彩夏山水    | 百八十四   | 松 | 原 | 八五  | 雅邦淡彩三聖     | 六百三十  | 山堂   |
| 雅邦鐘馗       | 百九十四   | 福 | 田 | 三二  | 釋尊三尊羅克世幅對  | 一千一十  | 川部印  |
| 常信玉昭君      | 百二十    | 平 | 山 | 六六  | 直入蓮池山水     | 百五十四  | 中村印  |
| 雅邦富士築波双幅   | 八百十八   | 平 | 山 | 二九  | 光琳弟好圖      | 百三十三  | 平山堂  |
| 鎌倉時代金物文硯箱  | 百二十一   | 京 | 田 | 五一  | 松蔭詩稿橫物     | 二百一十  | 伊藤   |
| 仁清桐茶碗      | 二百四十四  | 森 | 興 | 七六  | 半江青綠山水     | 四千二百  | 平山堂  |
| 桂谷境        | 百六十八   | 松 | 田 | 一〇〇 | 黑地源氏車繪唐櫃   | 百二十八  | 伊藤   |
| 時代染子地金刺襦   | 二百四十四  | 益 | 田 | 一〇〇 | 顧尚法師雅和教集卷三 | 二百二十二 | 平山堂  |
| 有亭花蝶       | 百六十八   | 渡 | 田 | 八四  | 乃木將軍旅次詩    | 百六十四  | 伊藤   |

| 品名         | 紙      | 寸 | 寸 | 寸   | 寸          | 寸     |      |
|------------|--------|---|---|-----|------------|-------|------|
| 和菓子着色文王太公望 | 千八百三十四 | 福 | 田 | 九三  | 伊藤公三行七律    | 三百一十四 | 川部五郎 |
| 唐物青貝人物香奩   | 百六十八   | 伊 | 藤 | 一一五 | 雲鶴狂言香奩     | 百五十九  | 森興   |
| 吳俊明極彩色年禮高松 | 百六十一   | 林 |   | 五九  | 秋暉溪流花鳥     | 百六十九  | 平山堂  |
| 後素勤王詩      | 百三十四   | 平 | 山 | 五三  | 唐物存生見山唐字盤  | 百一十一  | 近善   |
| 小堀大膳半六敷色紙  | 百七十七   | 平 | 山 | 七三  | 春放公朝鮮絹七絶双幅 | 九百五十八 | 伊藤   |
| 唐物青貝筆三本    | 百三十一   | 平 | 山 | 八九  | 雅邦淡河布袋     | 三百六十八 | 古玩堂  |
| 松花堂福祿壽三月景物 | 二百八十八  | 平 | 山 | 一四  | 雲漢雪中舟人物山水  | 六百一十  | 平山堂  |
| 堆朱山水彫合食盤   | 百五十一   | 平 | 山 | 二六  | 常信李伯觀瀑     | 千五百八  | 渡辺印  |
| 小菽春景山水     | 百二十八   | 森 | 田 | 二二  | 松花堂陶淵明     | 三百三十四 | 林    |
| 草雲米法山水     | 二百一十   | 大 | 川 | 一六  | 唐物青貝撒仁大筆   | 百八十八  | 平山堂  |
| 密洲淡彩夏山水    | 百八十四   | 松 | 原 | 八五  | 雅邦淡彩三聖     | 六百三十  | 山堂   |
| 雅邦鐘馗       | 百九十四   | 福 | 田 | 三二  | 釋尊三尊羅克世幅對  | 一千一十  | 川部印  |
| 常信玉昭君      | 百二十    | 平 | 山 | 六六  | 直入蓮池山水     | 百五十四  | 中村印  |
| 雅邦富士築波双幅   | 八百十八   | 平 | 山 | 二九  | 光琳弟好圖      | 百三十三  | 平山堂  |
| 鎌倉時代金物文硯箱  | 百二十一   | 京 | 田 | 五一  | 松蔭詩稿橫物     | 二百一十  | 伊藤   |
| 仁清桐茶碗      | 二百四十四  | 森 | 興 | 七六  | 半江青綠山水     | 四千二百  | 平山堂  |
| 桂谷境        | 百六十八   | 松 | 田 | 一〇〇 | 黑地源氏車繪唐櫃   | 百二十八  | 伊藤   |
| 時代染子地金刺襦   | 二百四十四  | 益 | 田 | 一〇〇 | 顧尚法師雅和教集卷三 | 二百二十二 | 平山堂  |
| 有亭花蝶       | 百六十八   | 渡 | 田 | 八四  | 乃木將軍旅次詩    | 百六十四  | 伊藤   |

|    |     |      |     |     |     |     |     |
|----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一六 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 一七 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 一八 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 一九 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二〇 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二一 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二二 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二三 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二四 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二五 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二六 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二七 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二八 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 二九 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三〇 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三一 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三二 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三三 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三四 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三五 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三六 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三七 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三八 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三九 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四〇 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四一 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四二 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四三 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四四 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四五 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四六 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四七 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四八 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 四九 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |
| 五〇 | ... | 二百一十 | ... | ... | ... | ... | ... |

|     |             |       |     |     |           |       |     |
|-----|-------------|-------|-----|-----|-----------|-------|-----|
| 二五  | 探出八景水屋山水三宿对 | 七百七十七 | 平山堂 | 二五六 | 黑地桐致散不香棚  | 百     | 平山堂 |
| 九四  | 雅邦第牛祭       | 二百四十八 | 芝佐藤 | 三七  | 狹仙拈猿      | 二百五十五 | 平山堂 |
| 一〇九 | 伊藤公五字款      | 三百二十八 | 伊藤  | 五九  | 秋晖慢流花鳥    | 二百五十四 | 平山堂 |
| 一一三 | 新井白石書簡屏風    | 三百七十八 | 波辺  | 四一  | 山陽七絶      | 百一十   | 川島  |
| 九九  | 華山草花屏風      | 千百七十四 | 宗   | 三三  | 抱紫野花美里桂為傷 | 百七十八  | 今井  |
| 四三四 | 時代念扇面流六曹扇   | 六百七十四 | 宗   | 一〇  | 松花書舒款     | 百五十四  | 平山堂 |
| 一〇一 | 大徳公四王行三條公八行 | 二百五十五 | 平山堂 | 三四  | 昌宋中茶壺     | 百     | 栗原  |
| 一〇二 | 伊藤公重要書      | 百八十八  | 波辺  |     |           |       |     |
| 一四三 | 斗屋茶碗        | 二百五十五 | 平山堂 |     |           |       |     |
| 二   | 菘翁松山水       | 百六十五  | 佐藤  |     |           |       |     |
| 一六九 | 梅小島詩餘卷      | 百八十四  | 海老屋 |     |           |       |     |
| 一五一 | 指張水朱卷       | 百一十   | 小島  |     |           |       |     |
| 二〇  | 光琳破墨山水横物    | 千五百   | 平山堂 |     |           |       |     |
| 二〇  | 光琳破墨山水横物    | 三百五十三 | 平山堂 |     |           |       |     |

次

上

(東京市立美術館蔵)



|                 |        |     |
|-----------------|--------|-----|
| 二五 探出八景水壘山水三宿町  | 七百七十七町 | 平山堂 |
| 九四 雅邦 菊牛祭       | 二百四十八町 | 若佐藤 |
| 一〇九 伊藤公五字額      | 三百二十八町 | 伊藤  |
| 一一二 新井白石書簡屏風    | 三百七十八町 | 渡辺  |
| 九九 華山草花魚輪四作     | 千百七十四町 | 宗   |
| 四三四 時代念地扇面流六曹扇  | 六百七十四町 | 宗   |
| 一〇一 大徳公四王行三條公八行 | 二百五十四町 | 平山堂 |
| 一〇二 伊波公重要書      | 百八十八町  | 渡辺  |
| 一四三 斗屋茶碗        | 二百五十四町 | 平山堂 |
| 二 菘翁松山水         | 百六十九町  | 佐藤  |
| 二九 梅小島詩餘卷       | 百八十四町  | 海老屋 |
| 一五一 指張水糸卷       | 百十四町   | 小島  |
| 二〇 光琳破墨山水横物     | 千五十四町  | 平山堂 |
| 七五 舍利塔          | 三百五十四町 | 平山堂 |
| 一七 清巖一行         | 百二十九町  | 香樹園 |
| 三九七 後三年巻物三巻     | 二百三十八町 | 水元  |
| 四二 桐野利秋書信問巻物    | 百六十四町  | 吟松堂 |
| 六 揮毫香信観瀑        | 四百六十四町 | 林   |
| 九〇 翠石月下猛虎       | 二百     | 若佐藤 |

|              |        |     |
|--------------|--------|-----|
| 二五六 黒地桐枝散末書棚 | 七百七十七町 | 平山堂 |
| 三七 担仙松猿      | 二百四十八町 | 若佐藤 |
| 五九 秋暉慢流花鳥    | 三百二十八町 | 伊藤  |
| 四一 山陽七絶      | 三百七十八町 | 渡辺  |
| 三三 抱紫野花美里柱為橋 | 千百七十四町 | 宗   |
| 一〇 松花書額      | 六百七十四町 | 宗   |
| 三四 昌宋中茶壺     | 二百五十四町 | 平山堂 |

次

上

(東葉丸の内有先産服)



平山堂用箋

ノレ賣上高

金壹萬。冬百七拾五圓五拾五也  
 冬二割引上味  
 金八千五百九拾八圓八拾壹也  
 高橋井小巻おのり石味  
 金八千五百五拾五也  
 出汁金壹萬。五百四拾八圓八拾壹也

平山巻 五千圓

増田 五千圓

高橋井 五千圓

出汁金壹萬 五千圓

大正

年

月

日

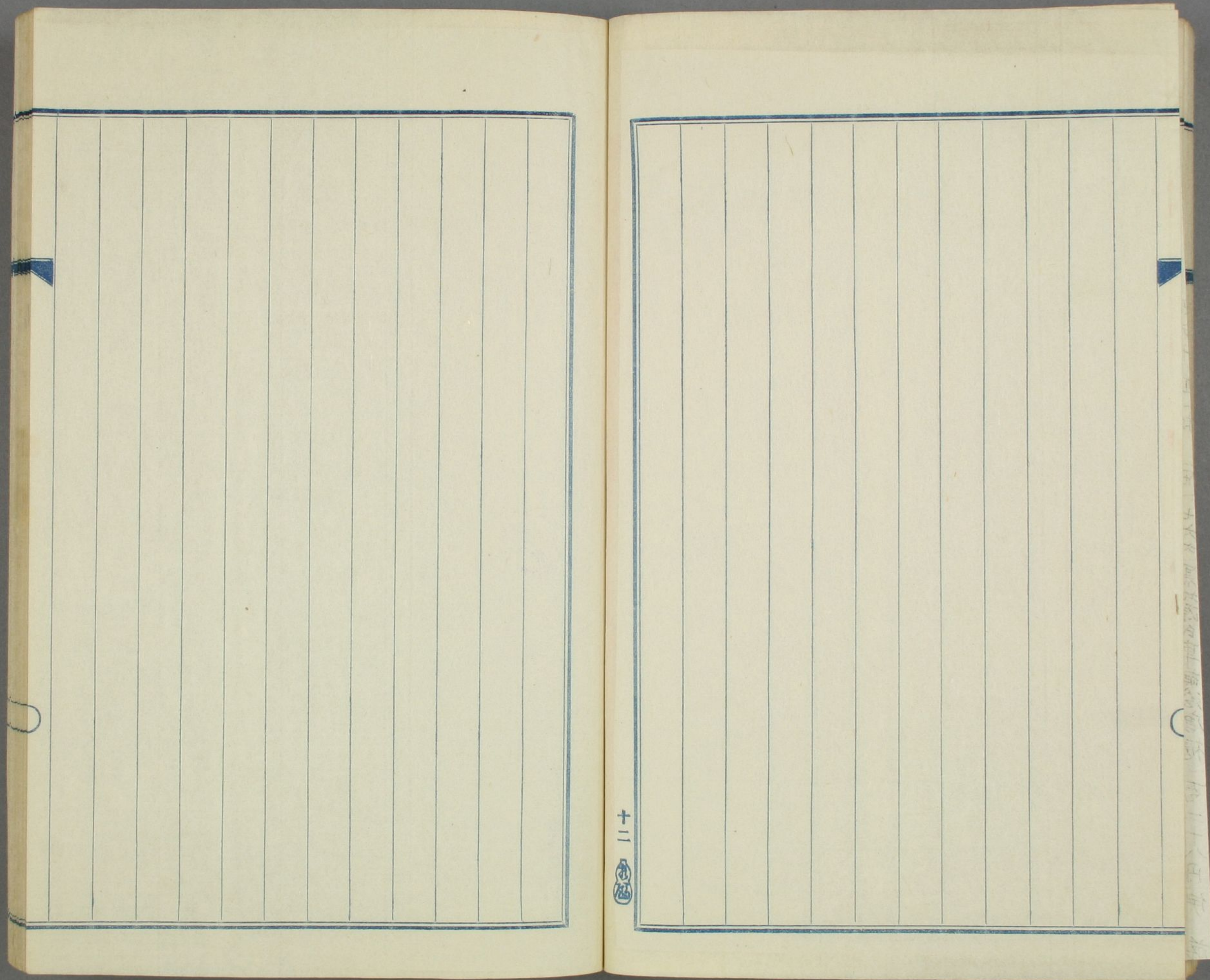
金不足五萬五千圓也

電話番町五百六番

東京市四谷區尾張町番地

上田  
三交印出  
番地

|     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 107 | ... | 107 | ... | 107 | ... | 107 | ... |
| 108 | ... | 108 | ... | 108 | ... | 108 | ... |
| 109 | ... | 109 | ... | 109 | ... | 109 | ... |
| 110 | ... | 110 | ... | 110 | ... | 110 | ... |
| 111 | ... | 111 | ... | 111 | ... | 111 | ... |
| 112 | ... | 112 | ... | 112 | ... | 112 | ... |
| 113 | ... | 113 | ... | 113 | ... | 113 | ... |
| 114 | ... | 114 | ... | 114 | ... | 114 | ... |
| 115 | ... | 115 | ... | 115 | ... | 115 | ... |
| 116 | ... | 116 | ... | 116 | ... | 116 | ... |
| 117 | ... | 117 | ... | 117 | ... | 117 | ... |
| 118 | ... | 118 | ... | 118 | ... | 118 | ... |
| 119 | ... | 119 | ... | 119 | ... | 119 | ... |
| 120 | ... | 120 | ... | 120 | ... | 120 | ... |



十二

〇〇〇

日新乃收多分出あり河内往復の旅ハ真ニ此  
を物ありんるも老り果せたると思ふゆへに  
ある様及令々臨む所の報を遠流や酒齋の賦  
流流流流しむ方へのむあり即ち方の海流河の流  
流るも骨を折るをそめ、右大段と相承ぬ  
とび中々の田村者一印の如きは壯士ハ人の多  
たを史ありて老るが二時るも余をたすはめき  
る政論るを老る、枝及子を校多るにこれ  
いひししと教略ハ男ハ此の心別ハ名も  
さつ、親戚や同友や師長や其のお家なる  
と毎た中々ハなく物政ハ過る流るもの

えいとうりしわあつちやあまにらる新報とい  
はるあゝこもつて前後への台と海り余の流  
流と筆跡をいふたこゝうさう大仕ふべし  
に初るとははるすし社中丁の道遠海に  
いへりていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
つき余のたはるすし社中丁の道遠海に  
ため余のたはるすし社中丁の道遠海に  
のらと社中丁の道遠海に  
けしうはるすし社中丁の道遠海に  
物にうへりていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
るとあつちやあまにらる新報とい  
と道遠海に

流りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
のらと社中丁の道遠海に  
けしうはるすし社中丁の道遠海に  
物にうへりていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
るとあつちやあまにらる新報とい  
と道遠海に  
に考りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
流りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
最中余を困むともいへりしはるすし社中丁の道遠海に  
に考りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
流りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
最中余を困むともいへりしはるすし社中丁の道遠海に  
に考りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
流りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
最中余を困むともいへりしはるすし社中丁の道遠海に  
に考りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
流りていへりしはるすし社中丁の道遠海に  
最中余を困むともいへりしはるすし社中丁の道遠海に

ありと濁きつしきる事よる、山崎藤樹は  
 出来るといふ功をさしこむこゝろに、  
 其の政史をどう評し、  
 の輩か察ありし、  
 一三、今乃、毛、六、八、九、の、  
 官見ある、  
 田、中、野、の、  
 流、東、中、の、  
 故、の、  
 方、有、こ、  
 流、又、と、先、け、  
 大隈、友、の、  
 別、中、ま、  
 田、中、  
 十、一、

淵 毎 日 新 聞 (三第) 號二 十五 百 六 千 二 第

●是之國産—新濁の佳麗

日本第一、大隈老侯の墨附  
 令詞來遊の目的、佳麗の鑑賞

二百の校友に擁せられてクマモウわけ新濁へお迎えする事もある、其時は此座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

座蒲團から降り出して斜に構いた白扇をも我國産佳麗に就て深刻なる御感歎を相應しいは大會後の宴會に羽三重のもある、これは令詞におかれて

砂地を以て新田を以て口下の地石を一説を以て  
と釈すところをも能く行井深に別り自  
動車とて廻りてこの昔を巡見し、後を  
即ち此北地の一治の心ありしに、同行の大  
隈は各所の集家生毎の式に接し、急に傳  
と考し、臨人休憩の暇を以て、  
この地の況を接し、  
四一、  
大正六年六月廿六日、  
あり

紙也

大隈侯別業、就てハ別項記する所あり、  
新田は其のあり、  
おに登載を待て、別冊奉成、  
にねんことを祈す

○輕井深とち生の代い、  
冬物のこと、  
を完へんことあり、  
おにすまし、  
あけの清涼を

五十年の年々多きを加へてお前し都府を  
すめりや邦人七割くこゝに徳を別荘を設くる  
ものあるもやうなるが、初めその度及遷を耳より  
のふもをかりて改済を成ししことよりししが今  
次ゆつやゆつと回ると北地のある部分をえりこ  
を得たりやうを、唯厚地の所々に属するもの  
着地のも多しあつて唯厚地と大隈に三千坪の  
土地を献ししもの別荘を築く事し之れをも  
済して献上するにこゝにちうりや、松も候り別業  
地：隣接して沼池系：原田次郎も早稲  
田大のうきやゆしと北地二番地ちうこの中  
津田も名し地と沼池うん買するやけ地あり

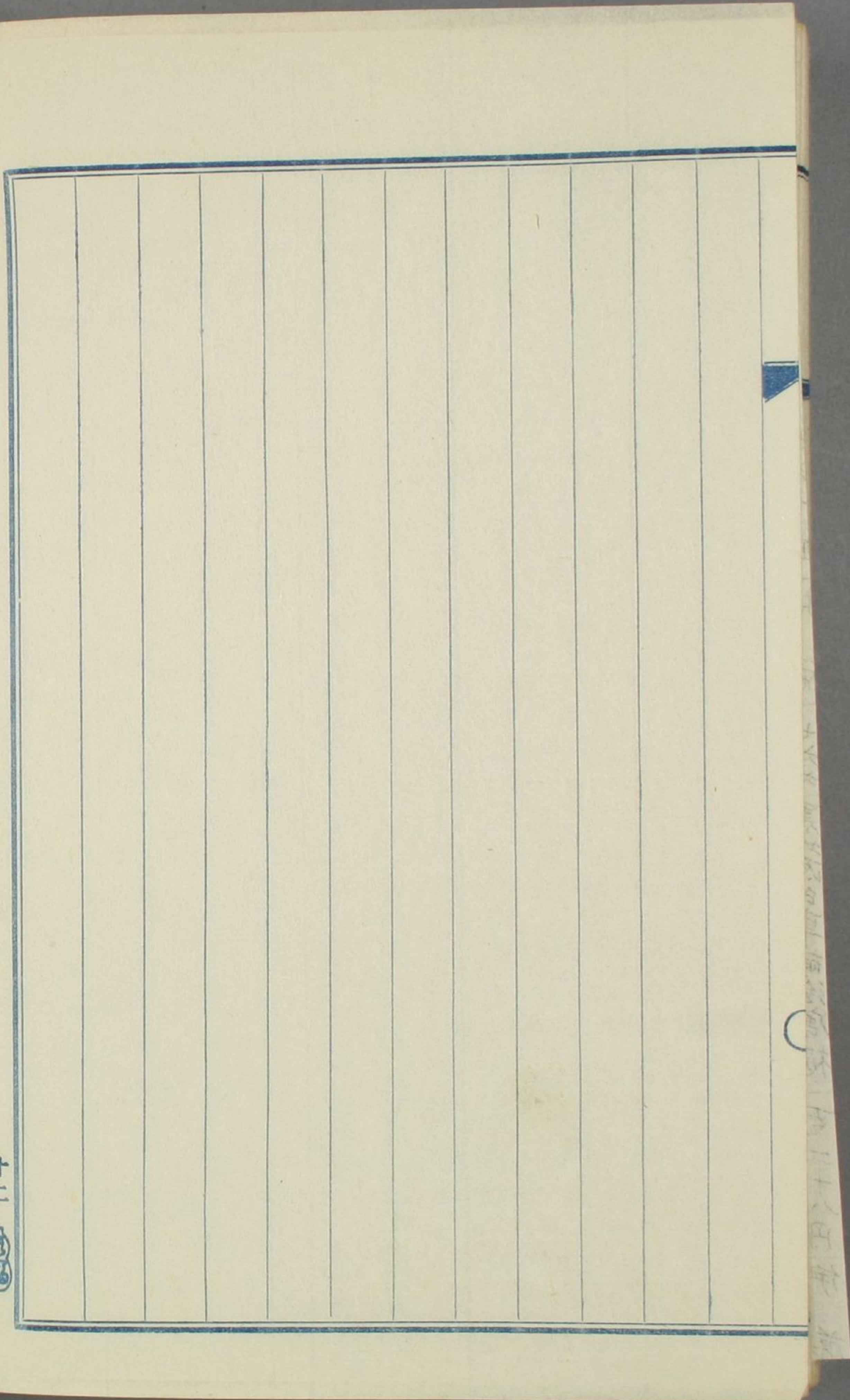
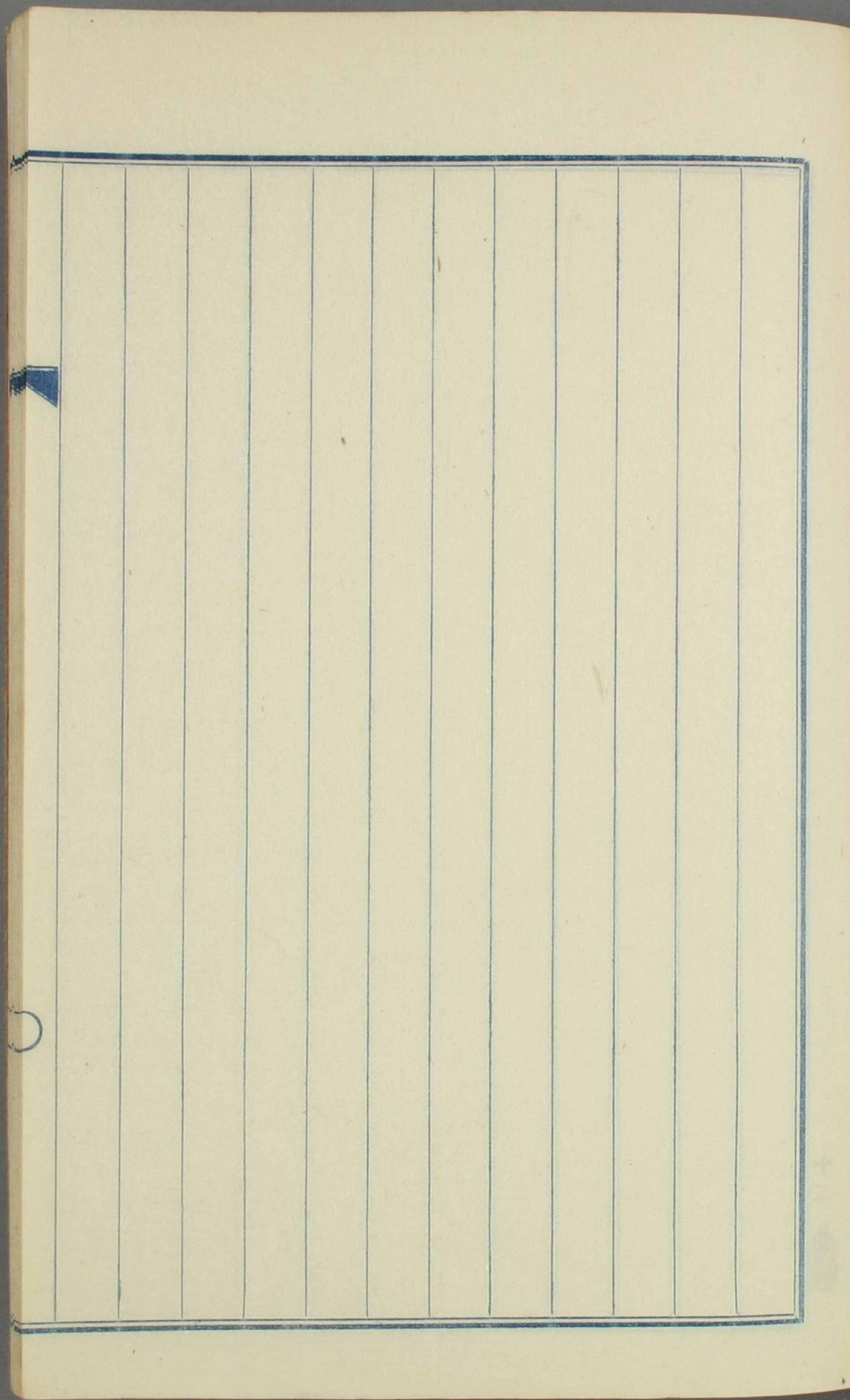
芝の平をとりて芝田：位するにこの地  
形よりししもの事と唯厚地の属するも余  
り多しと云地を捨らるゝこととせしむるに四大  
隈及びお前社地をせしむる候の思  
とせし捨らるゝこととせしむる候の思  
燭を重なりて捨らるゝこととせしむる候の思  
用地のせしむるにえんこととせしむる候の思  
七お七しりまはあつて唯厚地の所々に属するもの  
道路縦横：削けたり自動車と配する  
七る名をえりしとせしむる候の思  
且つ北地：家の出来ると唯厚地の未来に属  
すべしと想像ししり及りし、ふりやうをせしむる

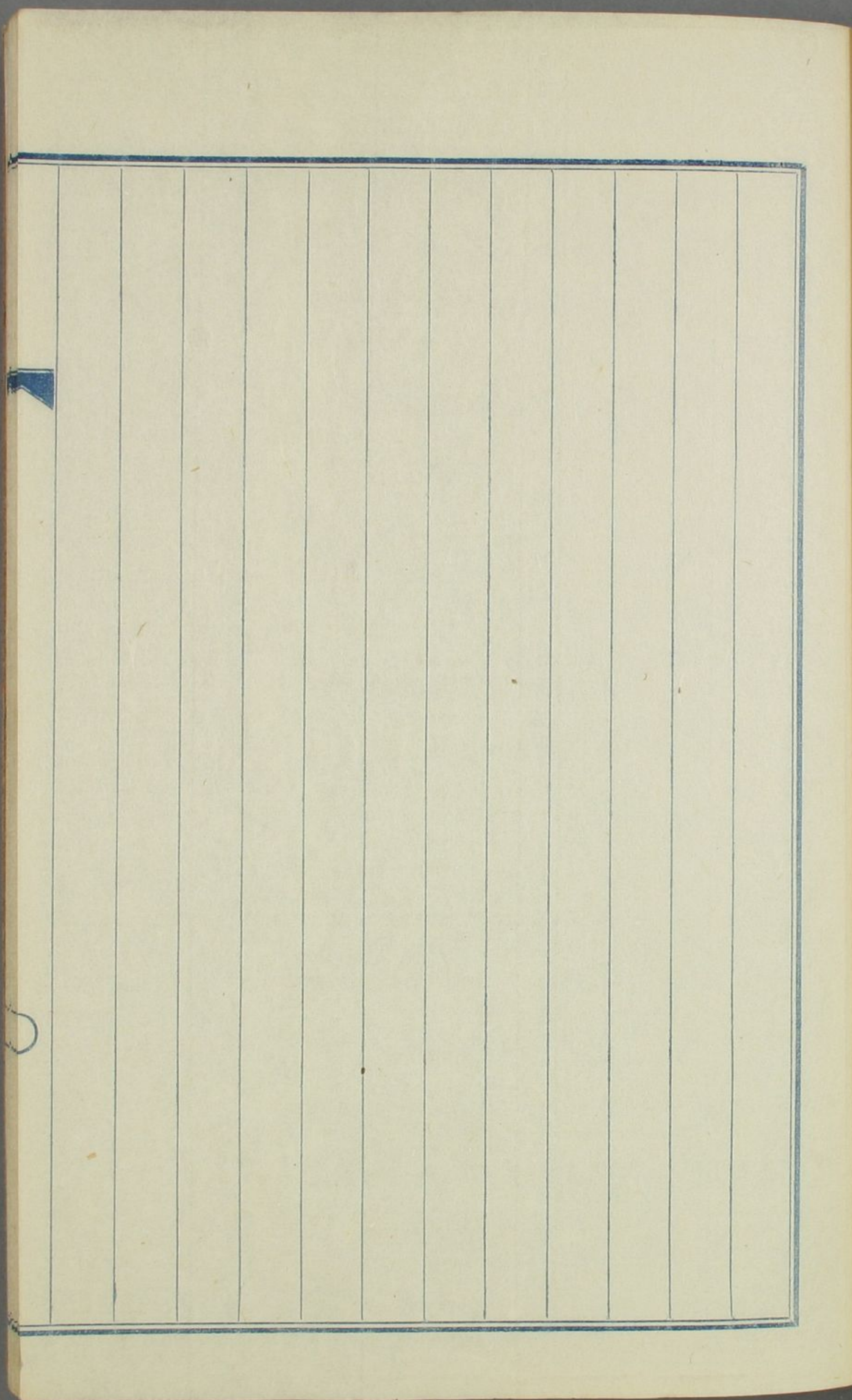




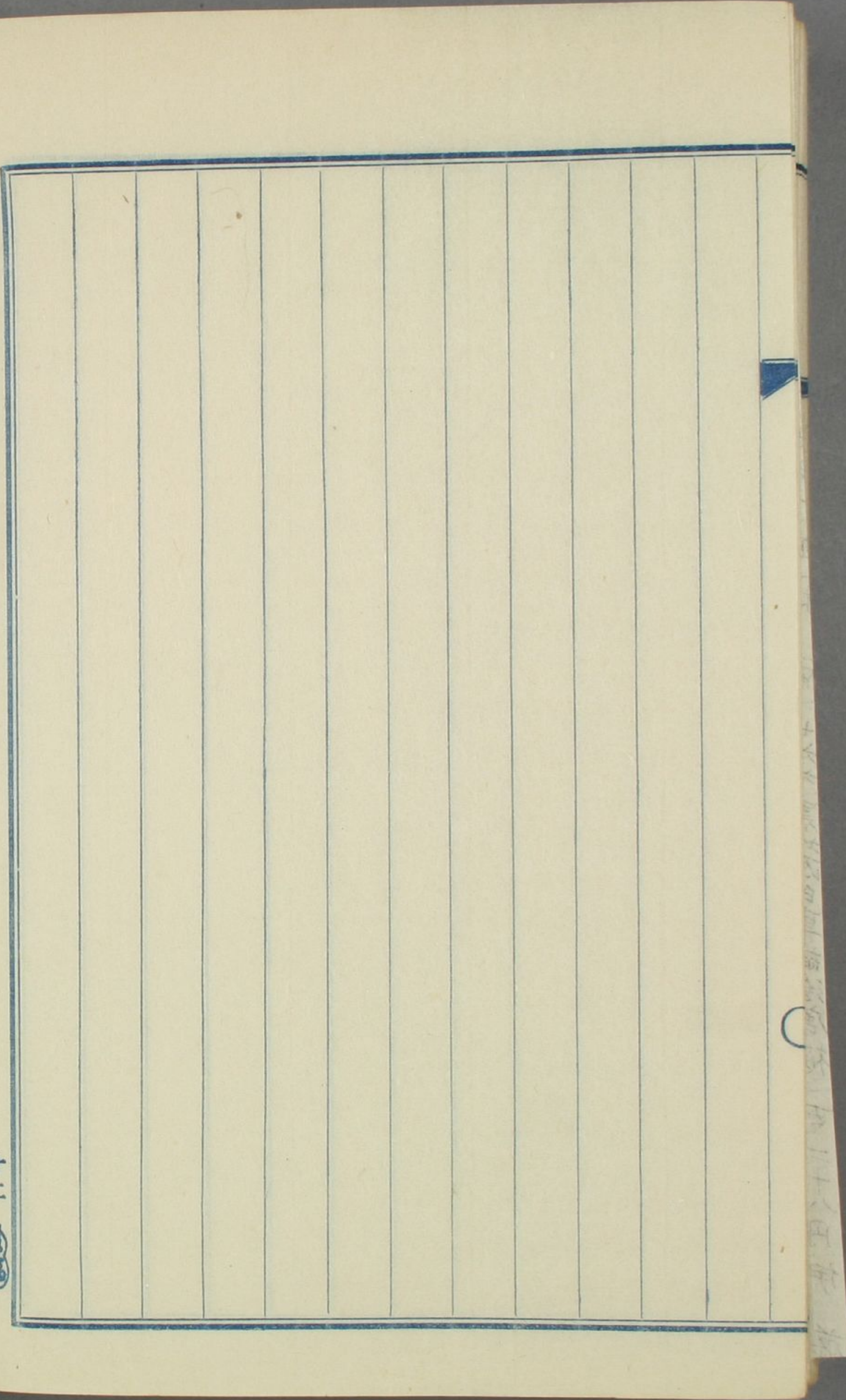
廿九日録

十二  
〇





十二



○六月廿一の中のことと追記す昔早朝大隈侯  
と詰詞する未だ此迄多し侯と語話と交る  
一時官が半余り其の校改革の件を詳細に  
陳ぶ侯と例と異なり其時終に甚可  
と賛成あり後新法に移る侯外交詢書と  
して一二の事と語る可く其の元とて語

不有し七箇の懸りやうに成す然りし  
○言ふに子あり由るは後ある事あり又これに  
戻し御陰名世のゆかりありし侯の心を以  
て解し行うせうし陛下と懇念ありせし  
侍従を遣はさん<sup>世</sup>問はし給ふ其時自  
分らしむるを三内河の旅行ありし<sup>心</sup>體積  
りん矢之内を御見せし出さしと奏せしむ  
其後物々長内拜謁を請はる陛下下とてお  
交詢書ありしを没けたるを御聞こむ自  
らより痛切に其の非ざるを奏せし陛下  
より<sup>其</sup>御聞り候がりと候くりと語る  
陛下に先以御物々の御冊を拜領し給

其、光榮也。余、河、山、世、間、世、に、山、路、侯、に、  
賜、り、り、と、清、志、と、同、歌、を、う、と、す、ふ、じ、ん、を、以、つ  
て、ん、ハ、清、志、を、申、ハ、十、の、高、齡、に、達、す、る、七、志、  
氣、壯、者、を、凌、ぐ、と、す、ふ、清、歌、と、関、下、に、對、し  
て、こ、を、言、ふ、を、得、し、山、路、侯、を、ハ、マ、ラ、ズ、果、し  
て、同、歌、を、や、と、候、笑、つ、て、同、く、山、路、の、も、て  
ハ、十、に、ま、し、て、め、め、し、と、祝、さ、ん、と、す、る、こ  
ま、が、同、歌、に、あ、る、か、ら、な、ま、を、余、は、又、物、の、心、評、に、  
ま、く、ら、が、お、附、き、念、に、物、の、心、評、と、す、と  
侯、又、丹、頂、の、鈴、を、拜、領、し、る、こ、と、を、得、ら、る、ま、  
と、光、榮、あ、る、ん、と、も、る、り、  
御、奉、の、雨、劍、を、時  
に、侍、從、職、時、に、余、を、ま、し、て、ま、う、と、な、る、此、に

七、遊、ち、を、大、山、阜、上、御、自、用、の、御、奉、を、願、い、  
へ、ら、る、ま、し、こ、ん、と、大、限、く、お、ろ、行、き、し、先、ん、其、  
高、に、丹、頂、の、鈴、を、見、え、し、ま、ら、し、と、の、御、奉、を、  
侍、從、を、ま、し、て、ま、し、と、な、る、  
侯、同、く、山、路、を、ハ、マ、ラ、ズ、見、の、忠、誠、を、あ、せ、  
下、敵、を、凌、ぐ、と、す、ふ、こ、ん、御、奉、の、口、お、ま、し、と、す、る、者、  
自、分、の、威、激、揚、を、能、く、し、る、所、を、し、低、ら、る、御、  
奉、つ、て、侯、の、金、額、に、ま、し、く、え、え、と、特、別、の、金、  
幣、の、お、ま、し、あ、る、ま、あ、る、ま、あ、る、ま、父、の、道、取、信、託、大、  
に、と、ら、う、な、る、前、を、毎、年、大、臣、對、面、し、御、奉、  
を、ま、し、て、今、日、の、御、奉、を、ま、し、と、な、る、こ、ま、し、と、な、る、

是職後、約二千、四、三、田、即、年、四、千、八、百、石、  
の、希、小、物、を、受、つ、く、こ、と、こ、う、と、  
余、結、理、不、見、在、職、中、一、際、下、り、希、千、元、と、  
の、金、幣、一、萬、石、一、萬、石、や、と、  
の、六、萬、石、一、年、俸、と、合、す、ら、  
田、二、千、石、と、  
信、常、又、同、宮、内、省、の、物、親、と、  
下、り、し、儀、式、的、の、物、を、大、臣、に、  
希、の、さ、さ、之、の、及、し、皇、  
と、ふ、都、府、が、め、り、る、若、干、の、  
の、例、も、制、親、の、意、を、緩、和、  
し、

大隈侯夫人、  
所、持、有、ん、名、大隈、  
為、貴、院、  
栗、の、折、也、余、  
献、上、  
信、常、  
時、  
聖、  
也、  
以、  
推、  
可、  
歎、

○之、長、交、迷、問、  
扱、の、さ、り、其、の、大、  
扱、の、さ、り、其、の、大、  
扱、の、さ、り、其、の、大、









く復起の心動き、後事もあつても、活潑なるも皆、全  
の復起を以てし、得ずと為さば、こゝに如く復職  
すべしと、意欲し、さうならん、坪内逍遙と、余と、先づ  
侯と、ゆゑにして、あつても、先づ、坪内天竺、  
ハキキ、新指と、活潑なるも、生れ、  
同と、得ず、  
其の、  
起り、  
日の、  
余と、  
活潑、  
都て、

ある、  
を犯す、  
動如、  
端、  
内と、  
を、  
叶、  
其他、  
か、  
の、  
不、  
各、



唯そのもとに自家の辭を以て破るべきに  
あらず余りの元帥を以てしとておれ  
後進を以てしとて補進しとてその  
親を以てしとて後之元帥と人に向つて余の辭  
を以てしとて市山の後進を以てしとてその  
此時の事と云ふる人三回もかたがた  
出るころに、此れを評任を以てしとて  
と暖昧の意をも取るの女とてしとて  
果すこのおれなる

高田の改革の衝にある事と云ふことと決し高  
田と其結果として来年からの務め亦に改革の  
務め亦を盛りの之を現任の夫とてしとて  
維新の

提出せしむる事と云ふことと決し高田  
運動と校るる事の向て起る事と云ふこと  
まゝの義の事と云ふことと決しとて  
道徳の校るる事と云ふことと決しとて  
あると共に、此れを以てしとて決しとて  
條ありて、此れを以てしとて決しとて  
判りて、此れを以てしとて決しとて  
此れを以てしとて決しとて決しとて  
殺せんつとて決しとて決しとて決しとて  
末の期に、此れを以てしとて決しとて  
とてしとて決しとて決しとて決しとて  
各下の條に、此れを以てしとて決しとて





